

## 『資本論』体系の図式的解明(中)

梯 明 秀

は し が き

- 一、方法と体系との関連
- 二、『批判』『序説』の方法論——(以上前号)
- 三、下向と上向との思惟様式の差異
- 四、上向のための要素的地盤と目的論的立場
- 五、上向過程における必然性と合目的性
- 六、ヘーゲルの思惟の円環的運動——(以上本号)
- 七、『資本論』への円環運動の適用——
- 八、上向下向の統一としての円環的体系
- 九、帝国主義段階への上向的演繹の必然性

## 三、下向と上向との思惟様式の差異

シェーマBにおける「現実的出发点」が端緒としての論理構造をもっている、ということの解明をまっぴら、始めてマルクス主義経済学の方法論の体系性を主張しうる、とわたしは前節の最後に述べておいた。しかるに一般には、『資本論』こそはマルクス主義経済学の体系的著述であると考えられ、そして、そのように考えるのは、その叙述の方法が体系的になっているからである、というように理由づけるのを普通のこととして、誰しも怪しまないかのようなのである。しかし前節において述べてきただけのことからしても、マルクス主義経済学の方法は、

『資本論』の方法としても、上向的思惟の叙述過程だけのものでなく、これが下向的思惟としての研究過程を前提したものととして、これらの両過程の統一でなければならぬことは、明かである。したがって、このような統一体としての方法論をもつ『資本論』の学的体系性を、その上向的な叙述過程にのみ限定して怪しまないということは、外見に囚われた常識にすぎないとせねばならぬであろう。このような常識は、両過程の統一としての体系的方法の、その一方の過程のみを見た一面的な、したがって具体性を欠いた不明確な認識にもついたものであるにしても、これが常識として学界に通用している現状に、問題がある。そこで本節では、『資本論』の学的体系性を説明するための前提条件として前節の最後に指摘されたところの、「現実的出发点」が如何にして方法論的端緒になりうるかの問題に入るまえに、否、この問題に入るにあたって、右の学界の常識から出発して、この常識にまつわる諸表象の誤りを一つ一つ除いてゆく、ということは、この学界的常識から脱け出すために当然ながら取るべき手続きとしなければならぬであろう。しかし、このようなテーマに関して論じられた諸文献を一つ一つ批判的に検討する余裕をもたない目下のはあい、わたしとしては、このことは読者に期待することに、そして、この期待を、かけうるための原理的な思想だけを、ここに論述してゆくことにしたい。

さて『資本論』の叙述の方法が体系的になっているというばあいの、この体系という言葉の意味であるが、これは、『資本論』の叙述においても、『経済学批判』『序説』においてマルクスの言ったとおり、「抽象的諸規定が思惟の途をとおって具体的なものの再生産にみちびかれてゆく」という論理的秩序に貫かれた方法の嚴存していることに問題はない。そしてマルクスも、この「抽象的なものから具体的なものへ上向する」ところの思惟様式を理論的方法と呼び、彼以前の、また彼自身の、経済学を理論的体系たらしめるための「学問的に正しい方

法」とも見なしたのであった。ところで、この上向的方法が、真に「正しい方法」であるためには、いいかえれば、彼以前の経済学の諸体系から彼自らの経済学の体系を質的に区別せしめるものであるためには、ヘーゲルの体系的思惟を、そのうちに媒介し止揚しておかねばならなかったのである。このことについては、前節において述べてきたところである。が、そのかぎりでは、『経済学批判』本文ないし『資本論』全三巻における体系的叙述を一貫した上向的方法を、真に「正しく」理解するためには、われわれは、ヘーゲルの体系的思惟との系譜的関連を分析せねばならないということになる。

にもかかわらず、この分析的吟味を、殆ど、ないしは全く、試みることもせず、ただちにマルクスの右の上向的思惟についての言葉のみを、公式的に受けとって、ただそれだけで『資本論』叙述の体系性を理解しようとする態度が、経済学界に普遍的であることを否定するわけにはゆかないのである。「抽象的なるものから具体的なものへ上向する方法」という公式は、マルクスがヘーゲルの哲学的意識を、したがって彼の哲学の体系と方法とを、批判して打ちだしたものであるからして、マルクスを信頼するかぎりにおいては、このような研究態度は、最初のうちは当然のこととして或は承認しておかねばならないであろう。しかし、このような態度だけをもって十分であると信じ、これに持続的に固執しているばあいには、公式そのものの研究には何の進展もないはずであり、したがって、この公式の適用において何らの創造性を期待することも不可能である、というほかないのである。なるほど、このような公式主義に安住している研究者の多くは、『資本論』の叙述が、これを第一巻にかざるばあい、たとえば、単純な規定の商品から初まって資本の複雑な諸規定へと上向しているという事実において、「単純なものから複雑なものへ」、あるいは「抽象的なものから具体的なものへ」という上向的な思惟様

式がそこに一貫しているということを容易に認識することができる。そして次に、「抽象的な単純なものから具体的な複雑なものへ」如何にして上向しているかを、その叙述における経済学的諸範疇の分析的吟味によって、したがって、叙述そのものを繰りかえし熟読し、さらに精しく確かめさえすることによって、事、実、的、に理解する。そして、これだけでも満足しているのが、普通でないであろうか。しかも、このような自己満足は、方法論的研究を心がけた経済学者のうちにさえ、見うけられるのである。しかし、「如何にして上向しているか」の事実についての理解だけに満足せず、さらに、この事実の成り立つ論理的根拠にまで掘り下げて見ようとする意図、——すなわち「如何にして上向しうるのか」という問題に気づき、この問題意識のもとに、現に実存している上向的叙述の背景に、この上向の必然性を根拠づけている論理的な実体を発見しようとする努力、——このような意図ないし努力なくして、方法論の専門的研究者といえるのであろうか。

さて、われわれが『資本論』における上向的方法を、表象として自分の脳裏に思い浮べらば、あるいは、この脳裏の表象を他人に伝えるために図式として描くば、われわれは一方の端に単純なる規定性にある商品、他方の端に複雑な諸規定をもつ資本を、それぞれ併置して、両端を一本の線で結びつけ、そして、一方から他方への上向的な前進をいみせしめるために、この連結線に矢印をつける。これを、読者はシエーマBにおいて既に見たところであるが、この図式における上向的な方法ないし思惟だけの部分を切り離したものが、後の第五節に挿入したシエーマE(I)である。しかし、このような図式は、すべて、真、実、の、理、解、に、み、ち、び、く、た、め、の、便、宜、的、な手段であり、若干の約束的な説明をつけて、真、実、の、意、味、を、髣、髴、せ、し、め、る、だ、け、の、も、の、に、す、ぎ、な、い、こ、と、は、、、い、う、ま、で、も、な、く、。

さて、右の上向的叙述の方法についての表象ないし図式についてであるが、そこにおいては、われわれは、まず最初に、抽象的にして単純な規定性にある物としての商品と、具体的にして複雑な形態をもつ対象としての資本とを、その相互の内的な関連を問うことなしに眼前に並べてみて、両者をそれぞれの外面的な規定性ないし形態において区別するであろう。ところが一般に、区別なるものは、論理的には、もともと同一性を含んだもの、あるいは、これを前提したかぎりのものとして、次には、両者を一本の線で結びつけて、そこに同一性の関係のあることを表示せざるをえない。しかし、このばあい、区別の関係と同一性の関係とが別々の操作によって定立されたにとどまるかぎりで、これらの関係の両項、すなわち商品と資本とは、それ自身の内面的な関係にはなりえない、したがって、商品から資本への上向というようなことは、到底、そこに考えることはできないはずのものなのである。この点の論理について、ヘーゲルは『小論理学』の「本質論」における「純粹なる反省規定」の第一七節で、次のごとく述べている。

——「区別は、第一に、直接的な区別、すなわち差別である。差別のうちにあるとき、区別されたものは各々それ自身だけでそうしたものであり、それと他のものとの関係には無関心である。したがってその関係は、それとたいして外的な関係である。差別のうちにあるものは、区別をたいして無関心であるから、区別は差別されたもの以外の第三者、比較するものうちにおかれることになる。こうした外的区別は、関係させられるものの同一性としては、相等性であり、それらの不同一性としては、不等性である。」——

対象としての商品と資本とが比較されるばあい、両者が相互に等しいとか等しくないとかと言われるわけであるが、これらの相等ないし不等という二つの関係は、それらの対象自体のうちに内的に横わっているはずのもの

であり、そこにおいて内的に統一されて同一性における区別という関係になっていなければならないものである。したがって、われわれも、これらを同一の立場から同時に把握すべき対象自体の二面的な構造である。にもかかわらず第三者としての認識主観は、或る側面ないし見地から見ても相等しいといひ、そして他の側面ないし見地から見れば相等しくないということによって、区別と同一性との本来の統一から、これら二つの関係を切り離して不等性と相等性との二つの関係に疎外してしまふのである。認識主観が外的対象と外的に対立したままで、そこに両者の内的統一が自覚されていない認識論的阶段においては、われわれの思惟は、つねに右のような働き方をせざるをえないのであるが、このような働き方をする認識能力が、悟性<sup>(2)</sup>である。とすればシェーマEの(I)を描くばあいには、われわれは既に悟性的機能において思惟していたということになる。ヘーゲルは同節の「補遺」において、「有限な学問の仕事は、大部分、比較による相等性および不等性の規定を適用することからなっており、今日では、学問的な取扱ひという言葉は、主として研究対象を相互に比較することが凡てだ、とする方法と考えられている」といって、数学および経験科学を悟性的立場にあるものと規定した。この規定によれば、われわれの前節で問題にしてきた下向的な思惟運動としての科学的な分析の過程もまた、当然ながら悟性的立場のものと考えなければならぬ。そして事実、十七世紀以来の経済学は、実証的な経験科学としては、諸国民の富を構成する諸要素を、その現存していた外面的区別すなわち差別の諸関係（『混沌たる全体の表象』ないし現象）のうちに、同じく外面的な同一性すなわち共通性を発見して、これを現象の奥の本質の領域に概念として固定することを、徹底せしめてゆくとともに成立し、そして発展させてきたはずであった。すなわち、そこで発見された悟性的概念を抽象的に固定して、富の内容に、普遍性の形式を与えんとしてきたのであるが、分業、貨幣、交

換価値、労働、欲望、等々が、この普遍性の形式としての抽象的諸規定であつたわけである。

(1) ヘーゲル『小論理学』の引用は、邦訳の岩波文庫版によるが、以下、簡略にするため、その頁数を一々示さず、原典『エントクロペディ』の節数を、たとえば (E-§ 117) というようにして文中に挿入することにした。なお、引用文が各節の本文のものでなくて各節の解説文あるいは補遺に書かれてあるものについては (E-§ 117, A) もしくは (E-§ 117, Z) というようにして、出所を明かにしておいた。

(2) 悟性の立場についてヘーゲルは次のごとく述べている。

——「悟性の働きは、一般に、その内容に普遍性の形式を与えることにある。しかも悟性の作りだした普遍は、抽象的な普遍であり、そのようなものとして飽くまで特殊に対立し、そのために、それ自身も特殊なものとして規定される。また悟性は、その対象にたいして分離的、抽象的に振るまうからして、あくまで具体的なものに關係し、そこに立ちどまっている直接的な知覚や感情とは、正反対のものである」 (§ 80, A)。したがって「思惟は頑固で一面的で、思惟に徹底することは危険であり有害であると、人々が非難するのは、悟性と感覚や感情とのこの対立に、もとづいているのである。こうした非難が正しいかぎりでは、われわれはまず、それにたいして、この非難に、悟性的思惟にあたるだけで、思惟一般にはあたらず、とくに理性的な思惟にはあたらぬ、と答えなければならない。——

要するに、われわれの「思惟は、最初は悟性的思惟であるが、しかし、思惟は、そこに立ちどまっていはいないし、概念とは単なる悟性的規定ではなう」 (§ 80, A) というのが、ヘーゲルの主張である。すなわち、「悟性としての思惟は、固定した規定性と、この規定性の他の規定性にたいする区別に立ちどまっており、このような制限された抽象的なものが、それだけで成立し存在する、と考えている」 (§ 80) のであるが、「これらの有限を諸規定は、自分自身のうちで自己と矛盾し、それによって自己を止揚することによって、反対の諸規定に移ってゆく」 (§ 81) のである。ヘーゲルは、悟性のこの自己否定的な能力を、その弁証法的契機と呼び、そして、この契機を生かしたかぎりの悟性は、すでに理性に転化しているのである。

このような悟性から理性への立場の転換が、そのまま、本稿本文における方法論としての、下向から上向への方向転換を、論理的に解明するための原理的意味になることを、ここに注意しておきたいのである。

もちろんヘーゲルも、単なる悟性的思惟にも、その権利と功績とを正当に承認していた。「理論の領域においても実践の領域においても、悟性がなければ確固とした規定は与えられない」としている。彼の挙げたところの、この悟性の権利と功績との諸例については、第八〇節の補遺によって、われわれは十分に理解しておかねばならぬ点である。

ところで、ヘーゲルも強調しておかねばならないとしている点であるが、「単なる比較というものは、また学問の要求を窮極的に満足させうるものでなくて、真の概念的認識のために——欠くことのできないものではあっても——準備となるものにすぎない」のである。ここに、学問の方法が、科学としての下向的分析の運動にとどまることができず、さらに上向的綜合への旅にまで進展せざるをえない理由があった。すなわち、下向的分析によつて抽象化され、生きた現実から引き裂かれ引き離されて固定されたところの、悟性的な概念なるものは、その自己否定<sup>(3)</sup>によつて真の概念的認識をなしうるところの立場にまで自己を高める必要があったのである。ヘーゲルは、このように悟性概念が自らの有限性の自覚において自己否定的に到達する立場を、理性の立場と呼んで<sup>(3)</sup>いるのであるが、このヘーゲルの理性の立場における概念能力としての自己展開によつてのみ、はじめて「後方への上向の旅」も可能であることを、マルクスも知っていたことに疑いはない。したがつて、下向の極点としての悟性的に固定された抽象的規定が、その悟性的な観念のままに「現実的出发点」に復元する能力をもっているわけではないのである。近世に成立した経済学が理論的に体系化しうるにいたるための上向的方法なるものが、あたたかも、かかる悟性的立場のものとしての上向の旅でしかなかったのである。したがつてまた、必然的に復元し



うるはずのマルクス自身の上向の旅なるものは、かかる悟性の立場の止揚に成立するところの理性の立場における概念的思惟の、主体的な自己展開であるべきであるがゆえに、元の生きた現実の具体物の表象ないし現象の牽引力によって引き戻されてゆくほかないというようなもの——経験主義への墮落——ではなくて、この表象を排除するために、また最初の現象が仮象でしかなかったことの確認のために、一途に進行する思惟過程でなければならぬ。要するに具体的現実の概念的把握を目指して、その直観的表象から自由に、自律的に前進してゆく思惟の必然的な自己運動でなければならないのである。

(3) この悟性概念の自己否定を、ヘーゲルは弁証法と呼んでいる。そして、「弁証法的なもの、学的進展を内から動かす魂であり、それによってのみ内在的な連関と必然性が、学問の内容に入り、またそのうちのみ、有限なものからの、外面的でない真の超出が含まれている原理である」と、『小論理学』で述べている。また『大論理学』においても、「概念そのものが進展するための契機となるものは、概念が自分自身のうちにもつところの否定的なもの *das Negative* であって、これこそ真に弁証法的なものにはかならない」（『大論理学』邦訳岩波ヘーゲル全集上の一、四一頁）とも言っている。

なお、悟性と理性との関係については、『小論理学』の「論理学のより立ち入った概念と区分」(§ 79, § 80)において、また『大論理学』の序論「論理学の一般的概念」(前掲書、三八—四四頁)においても、述べてあるが、前者の第七九節の本文および解説の全文が、これを要約して明示しているので、ここの註記としては、それを引用して読者の予備的な理解に資しておきたい。

——「論理的なものは、形式上、三つの側面をもっている。(a) 抽象的側面あるいは悟性的側面、(b) 弁証法的側面あるいは否定的理性の側面、(c) 思弁的側面あるいは肯定的理性の側面が、それである」(本文)。——

——「これらの三つの側面は、論理学の三つの部分をなすのではない。それらは、あらゆる論理的なもの、すなわち、あ

らゆる概念あるいは真理のモメントである。われわれは、それら凡てを、第一のモメントである悟性的なもののもとにおき、かくして、それらを別々に分離しておくこともできる。しかし、そのばあいは、それらの真の姿において考察されないのであらう（解説文）。――

さて右の引用本文にも明かなように、理性の立場には、否定的側面と肯定的側面の二つの契機からなっているのであるが、たとえば本稿で問題にしようとする上向的思惟を、単に弁証法的過程としてのみ見るばかりがあつても、そこには既に思弁的なものが契機として含まれていることを無視するのが、マルクス主義理論の学界に普通のこととして見うけられる。しかし、このことは、理性的な上向的思惟過程を、一面的にしか把えていないことにもとづくし、さらに、この一面的把握に満足しているということが、すでに論理の諸契機を別々に分離して固定したことになる。すなわち、それは、理性的思惟の、ないし弁証法的過程の悟性的立場からの把握にすぎないわけである。この点からしても、右の引用解説文のヘーゲルの注意は、きわめて大切である。

ここに述べられた下向から上向への弁証法的な方向転換の認識論的意味については、後節において詳細に吟味する予定であるが、そして、そのさいには特に、この転換においてヘーゲルのいうとおり、下向が上向のための単なる準備にすぎないものであるかどうかという点についても、正確な認識がなされねばならないのであるが、とにかく、今のばあいは差しあたってマルクスの上向的思惟の運動とは、まさに右に述べたような理性的な、立場のものであるということ、したがって悟性的立場、ないしは単なる科学の立場では真に理解しえないところの、そのいみでの哲学的なものとして、考察されるべきものであるということの認識をもつことを、とりあえず必要とする。そのかぎりでは、シェーマEの(I)もまた、商品と資本との単なる悟性的な比較だけのものでなくて、商品から資本への理性的な概念的思惟の必然的な運動を表示せんとしたはずのものであつた。とすれば、かかるい

みの上向的運動を問題にするかぎりでは、われわれも、いまや悟性の立場を棄てて理性の立場に高まっていなければならぬのである。対象としての商品から離れた第三者として、商品について外的反省の諸規定を与える科学の立場を転換せしめて、われわれの認識主観が対象的商品そのものになることによって、商品自体の内部構造を追思惟するという哲学的な立場に立っていなければならないのである。この哲学的立場は、本来ヘーゲルのものであって、これをマルクスが批判的に継承して『経済学批判』ないし『資本論』の上向的叙述の方法としたことについては、前節で指摘しておいたとおりである。そのさい、マルクス以前の理論経済学の諸体系における上向的方法が、いまだ真に「学問的に正しい方法」でない、とわたしは述べておいたのであったが、それは、その上向の出発点としての抽象的諸規定が依然として悟性概念たるにとどまって、その弁証法的止揚による立場の転換を、そこに見ることができないからであると、ここで認識論的に改めて明確化しておくことが必要であろう。生きた現実から切り離されて固定されたところの、悟性概念からの演繹は、形式論理学的な、仮設からの現実の説明というだけのものであって、それが現実的な対象自体の自己運動を反映するか否かは、論証をまたねば解らないという点で、ヘーゲルのいう概念的認識に固有の必然性を欠いているものであった。そして、スミス、リカルドの上向的思惟もまた、この例外でなかったのである。

(4) 『資本論』の叙述において、このような立場の転換を読者に要請している個所は、第一巻の第一章における第一、二節から第三節への移行の過程である。この移行の過程において、この弁証法的な立場の転換を意識しない人々は、『資本論』全三巻に互に上向的叙述を、したがって、それを貫くマルクスの概念的思惟の弁証法的自己展開の論理を、理性の立場において、そのかぎりでもたまた真に弁証法的に、理解しえないままに済ましてい人々である、というほかはない。——この立場の転

換については、拙著『資本論の学問的構造』所収の論文「現実的な学としての資本論」において詳述し、その意義を強調しておいた。

ところで、マルクスが「学問的に正しい方法」としてヘーゲルから継承した上向的な概念的思惟の方法は、ヘーゲルが『論理学』の体系のなかで採ったところの方法であり、しかも彼自身も、そこにおいて、「なお多くの完備と多くの徹底とを必要とするものであることは、私として知らないわけではないが、しかし同時に私は、これが唯一の真実な方法 *die einzige wahrhafte Methode* であることを自認している」(G. I-S, 40)<sup>(5)</sup>ところのものであった。そこで、ヘーゲルに遡って、この方法の精神を深く理解するために、この方法を現実の实在世界への適用において成立したと見らるべき彼の『法の哲学』から、さしあたり次の言葉を引用しておく必要がある。

「哲学の取りあつかうものは、理念である。したがって、それは単なる概念と言ひ慣わされているものであつてはならぬ。むしろ哲学は、かかるものの一面性と非真理性とを指摘し、それとともに概念——単に抽象的な悟性規定にすぎないものでないところの概念——が、独りよく現実性をもつところのものであり、しかも、それゆゑに概念が自ら現実性そのものを賦与するということを、示すものである。……概念がその実現過程において自ら賦与する形態は、概念そのものの認識にとつて、ただ概念としてのみある形式から區別されたところの、理念の他の本質的契機である」(Ph. R-S, I.)<sup>(6)</sup>——

すなわち、ヘーゲルもまた既に、マルクスの『批判』『序説』の文章が単純に読まれたばあいに一般に皮相的に理解されているようには、概念をもつて単に頭脳のなかだけの観念的のものであるとは、けつして考えていなかつたのであつて、むしろ、思惟に内在的な概念は、必ず自己自身に照応する定有的实在性を自ら賦与しないかぎ

りでは、一面的であり非真理である、と主張するのが彼の哲学的意識であったのである。そして、この主張のもとに、具体的現実の概念的把握という方法論が、彼に打ち出されているのであった。とすれば、このヘーゲルの哲学的意識における方法論とマルクスの概念的思惟の方法とは如何なる点で質的差異をみるべきか、という問題が今ここに出てくるわけであるが、とにかく、ここでは、「法の理念、法の概念、および、その実現過程」を研究対象にしたのが、实在世界を全体として法の世界とみた『法の哲学』であったにたいして、实在世界を本質的に経済の世界の領域と見て、これを概念的に把握したところの『資本論』は、「商品の概念、および、その実現過程」を研究対象にしたものである、という継承関係における本筋の途を、とりあえず辿ってゆくことにしたい。

(5) ヘーゲルの『論理学』、すなわち『大論理学』からの引用文および頁数も、邦訳の岩波版ヘーゲル全集からのもので、原典からのものでないが、以下、ここにおけるように、(G. I. S. 40) というように、本文中に挿入して註記を簡略化することにした。

(6) ヘーゲル『法の哲学』からの引用も、右と同じく速水敬治氏の邦訳により、原典の節数で出所を示し、ここにおけるように、(Ph. R. § 1) というように統一することにおいていた。なお、本稿に引用された文章の全体については、傍点は筆者によるものである。

そうすると、マルクスはヘーゲルの「理性的なものと現実的なものとの一致」という思想を、経済的な实在世界に特殊化して適用したわけであるが、そのばあい、この思想を一そう具体化しさらに徹底せしむるという方向において、マルクスがそこから継承したものは、当然ながら、概念的把握という方法でなければならなかった。概念的把握ということは、現実のうちに理性を見るところ、实在のうちに概念を認識することである。そして、このことは、ヘーゲル哲学固有の対象としての理念なるものが、もともと客観的な实在と主観的な概念

この本来的な一致に成立している (E-§ 214) ということから、必然的にでてくる認識方法である。そして、ヘーゲルが「唯一にして真実の方法」と呼び、マルクスが「学問的に正しい方法」と呼んだところの、概念的思惟の自己展開ということこそ、この概念が理念たる所以の要請にしたがって「自らに実在的な形態を賦与せんがための実現過程」として、まさに、概念的把握と呼ばれるヘーゲル自身の認識方法そのものことであつたわけである。そこでマルクスが、資本主義社会の現実的総体を、このヘーゲルから継承したこの概念的把握の方法によつて、学問的に、したがつて体系的に、把握せんとしたかぎりにおいて、資本の概念の「最も抽象的なものから最も具体的なものへ」という上向的な思惟方法を、採用するほかなかつたわけである。

ところでマルクスは、『経済学批判』ないし『資本論』において概念的把握の方法を完全に具体化するまでには、すでに若かりし四四年において「疎外された労働」なる『手稿』断片において、この方法を資本主義社会の最も基本的な事実に適用して、この方法自体の唯物論化を成就したのであり、また、このことによつて、後の彼自身の経済学の体系的展開のための方法的な基礎を築いているのである。すなわち、この『手稿』断片は、私有財産制度一般の概念的把握というべき労作であるが、当時の国民経済学が単に実証主義的にしか、したがって肯定的にしか問題にしえなかつたところの私有財産の事実を、この事実から出発して、その概念にまで下向的に掘り下げ、この概念の要素的形態としての「疎外された労働」から、漸次その規定を複雑にしなが<sup>(7)</sup>ら、最初の下向の出発点に復帰してゆくという上向の論理を、すでに展開しているのである。そして、この体系的な方法が、形式の点からいって、下向の出発点と上向の到達点と一致といういみにおいてヘーゲル的なならぬ一つの円環を描くことは明らかであるが、その思想内容からみると、下向の出発のさいに前提した私有財産についての国民経済学的観念を、

上向の到達点において否定的に再構成しているのである。この点、『資本論』の上向的叙述が第三卷の最後に到達したとき、いわゆるブルジョア的な「三位一体の信条」を、社会的総資本の概念的な再構成によって仮象として斥けたと異なるものではない。要するに、四四年『手稿』の対象であった資本家的私有財産が、資本家的富として経済学的範疇に明確化されたところに『資本論』が成立したままで、マルクスの方法論ないし学的体系は、四四年の『手稿』に成立して、そこから発展していったものと理解されうるものである。そして、それは、唯物論化されたかぎりの概念的把握の方法として、さきにも指摘したとおり、科学にして同時に哲学でもあり、悟性的にして同時に思弁的でもあるという構造にあるものでなければならぬ。

ただ『手稿』断片にあつては、概念の要素的形態を抽象するための下向的分析が、いまだ実証的な経験科学におけるそれのごとく帰納的ではなく、なおヘーゲル的な思弁の余影を残したものであったことは争われない。すなわち、悟性的であるべき方法を悟性的なものとして展開し叙述しえていないのである。しかし、この残滓としての思弁的な分析方法も、そのころ同時に始められた彼の経済学研究が、近世の諸学説、諸体系の批判的分析へと、したがって、現実の資本制社会そのものの科学的分析へと、系統化されるにつれて、全く取りのぞかれていったわけであるが、だからといって、思弁的方法そのものを排除したわけではなく、これを科学的方法のうちの一つの契機として止揚したまでのことであつたし、しかも、さらに向自的に、この契機を上向的方法の原理として定立したことについては、今までの論述で予め、ほぼ推察されうるはずであろう。事実、『手稿』断片においても、ヘーゲルから批判的に継承したこの思弁的契機のゆえに、マルクスは国民経済学の私有財産制度にたいする単なる実証主義的な把握を誤謬として斥けることができたわけである。この点を「明かにするために、われわ





れは、ヘーゲル自身の思弁的方法と、それがマルクスに批判的に撰取されたかぎりのそれとの差異——したがってヘーゲルの概念的把握とマルクスのそれとの差異——について、ここで多少の紙数を割いておくことが必要であらう。そして、この差異のみならず、この方法のヘーゲルからマルクスへの継承過程を明らかにするために、シェーマCを次に挿入してみた。

(7) この点については、拙稿「四四年手稿断片（疎外された労働）におけるマルクスの哲学思想」（『立命館経済学』第三卷第六、七号および第四卷第一号に連載）を参照されたい。——マルクスの思想体系におけるこの『手稿』断片の位置づけについて、わたしとしては、夙に戦前から問題を提起し、その基本的な考え方を主張するところがあった。拙著『資本論の弁証法的根拠』所収「人間労働の資本主義的自己疎外」がそれであった。しかし、そこでは、「疎外された労働」なる概念の思想内容の重要性は、すでに十分に認識しておくことは出来ていたとしても、この『手稿』断片において『資本論』にまで発展すべき体系の萌芽の潜んでいることについては、気づくこともできなかった。このことの発見は、右の拙稿によって、この断片そのものの体系性に注意するようになってからのことである。

(8) ヘーゲルの哲学においては、その概念的思惟の発展が必然的に円環的運動をなすのであり、この円環が体系をいみずること、後節において明かになるところであるが、マルクスの『資本論』においても、それが学的体系でありうるためには、彼の概念的思惟の自己展開もまた、必然的に円環を描くものと考えられねばならぬ。そこで両者の質的差異が問題にされねばならないにしても、これは、この学的体系の原理としての思惟の円環運動の構造の差異に、その解決を見いださるべきものである。この点については、本稿の最後の部分で解明さるべきものであるが、ここに予め、両者の差異を端的に言い表わすならば、前者が、完結的な、閉ぢられた体系であるにたいして、後者は、未完結の、開かれた体系である、ということができる。——これについては、拙著『資本論への私の歩み』所収の短文、および拙稿「資本論の学的体系性」（『立命館経済学』第一卷五・六合併号）を参照。

ヘーゲルの理念は、現実と理性との、実在と概念との統一であるといつても、この現実的実在とは「概念そのものによって定立されたもの」にかぎるのであつて、それ以外の一切のものは「暫時的な定有、外的偶然性、臆見、本質なき現象、非真理、欺瞞、等々」(Ph. R. § 1)、要するに仮象として排除しているのである。そして、概念自体が、純粹思惟の自己同一性<sup>一</sup>というところが、理念なのであるから、この理念のうちに概念と実在とが區別されているといつても、この區別は概念自体における區別にすぎない。概念は、その即自的な直接態に潜在する區別を顕現して向自的になり、この自己媒介性によって再び直接態に復歸して即自かつ向自的になるといつて円環的な運動を描くのであるが、さらに、この円環的運動が、マルクスによって上向的と呼ばれるにいたつた概念的思惟の直線的進行過程にたいするその体系的な意味をなしていることについては、今しがた触れてきたところである。そこで、ヘーゲルにあつては、「哲学の全体が完了して始めて、理念は、具体的に表現される」(E. § 18)ものであるといふことになるにしても、その概念的思惟の出発点である抽象的概念も、また理念の直接的な表現であることには、変りはない。——図形(Ⅱ)の(a)を見よ。

すなわちヘーゲルの思弁的方法なるものは、直接的理念における実在と概念との區別<sup>一</sup>、同一性<sup>一</sup>から出発した上向的な自己展開の過程であるといふことができる。したがつて、かかる上向的思惟の主体は、理念ないし概念そのものであり、ヘーゲルにおいては絶対精神としての神であつたし、人間としては、この神の立場に立つたかぎりの理性的人間であつた。ところで、われわれ現実の感性的な人間は、図形(b)および(c)において表示されるように、ヘーゲルが仮象として哲学の領域外に排除していたところの「外的偶然性、臆見、非真理、欺瞞、等々」の「本質なき現象」の中に生活しているのである。したがつて、われわれが現実的な実在について学問的思惟を

始めるためには、感性的直観に与えられた諸表象から出発するほかに方法はないのであり、しかも、この現象界の背後の本質の世界をトライ・エンド・エラーの分析を、飽くことなく徹底せしむることこそ、この与えられた唯一の方法であるわけであり、しかも、この方法こそが、まさに、経験科学に固有の帰納的分析としての下向の方法であるわけである。そしてマルクスが、ヘーゲルから概念的把握の方法を継承するばあいに、十七世紀の経済学以来の科学的なこの下向の方法を撰取せざるをえなかつた理由も、実にまた、ここにあつたと考えねばならないわけである。しかも、この撰取のためには、彼の四三年の経済学研究への着手から『批判』『序説』を執筆するまでの長い期間を要したと見るべきであるが、しかし、この期間は、同時に、ヘーゲルの思弁の方法を唯物論化するための過程でもあつたのであり、したがって、悟性的にして同時に思弁的でもあり、したがって科学的にして同時に哲学的でもあるところの、マルクス固有の概念的把握の方法を樹立しつつ、『資本論』としての学体系的構想を具体化したところの過程でもあつたのである。

(9) シェーマCの(II)における(b)と(c)とは、『手稿』断片「疎外された労働」と『資本論』との方法論的体系的同一性が表示されてあるものである。要するに、『手稿』における概念的把握の方法の対象としての私有財産制度一般、近代社会に特殊化的に限定され、それが経済学的範疇によつて規定されるにいたつたものが、すなわち『資本論』である。『資本論』の体系的図式としての(I)を、ここに特に描いておいたのも、(c)を九〇度左に回転すれば、それと同一であることを表象に訴えんがためにすぎない。

#### 四、上向のための要素的地盤と目的論的立場

『資本論』における上向的叙述の方法は、古典経済学を理論体系たらしめているところの上向的思惟方法――

すなわち悟性的概念による現実説明の方法——そのままの継承ではなくて、むしろ、この悟性の立場の弁証法的な止揚に成立する理性の立場にある上向的思惟方法というべきヘーゲルの概念的思惟の方法を、批判的に継承することによって可能とさるべきものであった。そのかぎりでは、端緒的商品の単純な抽象の規定から始まって、社会的総資本の諸形態が統一的に把握されている豊富な具体的概念にまで到るところの、概念的な思惟の発展は、ヘーゲルのばあいと同じく、理性的概念の自由にして自律的な範疇的自己展開の過程であり、思惟の主體的な自己運動を原理とするものであると考えねばならない。ただ、ヘーゲルにおける概念的思惟の自己展開は、その純粹の姿で論述されている『論理学』が『精神現象学』の結果として出てきたもの<sup>(1)</sup>として、意識と対象との外的な対立関係を止揚し統一したところに成立する純粹思惟ないし純粹知識を、要素 Element としているにたいして、このヘーゲルのな統一が純粹思惟にまで止揚される以前の対立関係が、なお契機として残されているような統一——すなわち感性と思惟との矛盾的自己同一性——を要素 Element として、この地盤 Element のうえに成立する概念的な自己発展が、マルクスの、したがって『資本論』の上向的思惟の自己運動であることについては、前号第二節で触れておいたとおりである。ヘーゲルとマルクスとの間におけるこの質的差別については、なお詳細に後節において述べなければならぬが、この質的差別が認識されえたとしても、なお、そこに抽象さるべき共通なもの、同一なものが、理性的立場における概念的思惟の範疇的な自己展開という方法であることに、問題はない。そして、この方法が『資本論』にあつては、商品から資本へという上向的叙述という姿で現れているわけである。したがって、これらの商品も資本も、ともに理性概念であることには問題はないが、しかし、これらの概念は、単に純粹思惟的なものでなく、同時に感性的にして実在的なものでもある。すなわち、物としての商品から物的

対象として資本への自己発展の過程が、まさしく『資本論』の叙述の内容でなければならぬ。にもかかわらず、この自己発展が実在的でありながらも依然として論理的であるという意味における叙述の形式は、いかえれば、実在的な自己発展の論理そのものは、まさにマルクスの理性概念によって成り立つものと考えられねばならぬのである。そこで、このマルクスの理性概念がヘーゲルの理性概念の批判的継承であったかぎりでは、『資本論』叙述における諸範疇を論理的に理解するにあたって、われわれが常にヘーゲル的な思惟様式を批判的に媒介せねばならない、ということには、何の異議もあつてはならないはずであらう。

(1) ヘーゲルの『精神現象学』は、彼のいう絶対精神がわれわれの自然的意識のなかに如何にして現象してゆくか、したがって、このばあいには自然的意識が、その最初の抽象的感覚から始まって、漸次に採ってゆく諸形態が最後に何故に絶対知であるべきか、ということを叙述したものである。これについての『大論理学』における説明は、次のごとくである。——「私には精神現象学の中で、意識がその対象との最初の直接的対立から出発して絶対知にいたるまでの進展運動を叙述した。この道程は、意識のその客体にたいする関係のあらゆる形態を通過して、その最後にいたって学の概念を獲得する。……絶対知は、意識のあらゆる形態の真理である。というのは、かの意識の道程が絶対知に達するとき、その絶対知のなかでは実際、対象とその対象そのものの確実性と分離は、完全に解消され、真理は、この確実性と同じになり、また、この確実性は真理と同じになったからである」(S. 33-4)。——すなわち、この絶対知についての学が、ヘーゲルの『論理学』である。これは、「意識の対立からの解放を前提している」(S. 34)というみで「純粹学」とも呼ばれている。そのかぎりでは、「論理学の定義(ないし権利づけ)は、この学の成立の必然性(≡精神現象学の過程そのもの)の中のみ、その証明をもっている」わけで、このことが、『論理学』が『精神現象学』から出てきたということの意味をなしているのである。

ヘーゲル哲学の全体系のなかにおける右の二つの学が如何に相互に関係するかの問題については、わたしとしても前掲の

「現実的な学としての資本論」および「資本論の学的体系性」において、若干触れておいたので、ここでは註記することを省略したい。ただわたしとしては、右の関連を『資本論』の立場から見るとして、特殊な一面にだけ思索したものとどまると思えるが、この思索は「物質の現象学」の構想にまで発展している。最初は、すなわち現実的な学としての「資本論」においては、『精神現象学』が感覚的意識形態から始まっていることから、『資本論』体系への位置づけとして、下向的研究過程としてマルクス自身によって批判的に継承されているのでないかという着眼をしておき、しかも「諸商品の感性的直観」（『立命館経済学』第二巻第五、六号第三巻第一号連載）においては、かかる位置づけを明記しておきさえした。しかし、その後、『資本論の学的体系性』および「労働市場における法的人格」（『立命館法学』第十一、二、三号連載）においては、唯物論的認識論の根底にかかわる本質的問題として、一そう深く掘り下げねばならないことに気づいてきている次第である。この「物質の現象学」が『資本論』体系において如何に位置づけられるべきかの点は、後節で述べることになるので、以上のことだけを、ここに予め註記するにとどめるが、本節本文における「感覚と思维との自己矛盾的统一が上向的叙述のエレメントである」という主張自体が、右のわたしの構想する学の原理であることは、いうまでもない。

そこで今われわれは、物としての商品から物的対象としての資本への実在的な発展過程の論理として、商品概念から資本概念へとという理性概念の自己展開の過程を問題にしようとするのであるが、ここで先ず第一に問題にすべきことは、マルクスが『資本論』の冒頭文節において「個々の商品は資本家の富の要素的形態として現れる」と述べて、商品をもって資本の要素と規定していることについてである。冒頭文節のこの一句の解説にあたって、この「要素的形態」を譬喩的に「細胞形態」とすることに必ずしも誤りはないし、マルクス自身もこの譬喩的解説を敢えて使っていることも事実である。しかしながら、われわれがこの譬喩的理解に満足して、その論理的意味を無視するにおいては、叙述における概念的思维の進行そのものの本質を理解することはできないと思われ

る。いまも述べたようにヘーゲルにおいては、『精神現象学』における対象と意識との対立が止揚された統一としての純粹知識ないし純粹思惟が、『論理学』を成立せしめるための要素になっているのであるが、これについて彼は次のごとく述べている。

——「この統一は、論理の要素をなすものであって、すなわち論理学的原理である。したがって論理学の区分は、この論理的原理の内にあるのであって、区分の展開も、ただこの要素の内部においてのみ行われる。というのは、区分は概念の判断（＝原始分轄）であり、すでに概念に内在しているところの規定の定立であり、つまり概念の区別の定立であるから、この定立は、いまいう具体的統一（＝純粹思惟）が単に自立的にあるような規定のなかへ再分解することとして見られてはならないからである。もしそうだとすれば、それは以前の立場への、すなわち、意識との対立への、無意味な復帰であろう。しかし、こういう対立は、実はすでに消滅しているのである。いまや統一があくまでも要素としてあるから、この区分と、一般に展開として現われる区別とは、ともに、もはや、この要素の外に出ることはできない」（G. L. S. 48）。——

すなわちヘーゲルにおいては、『論理学』が純粹思惟の概念的な自己展開の体系であるかぎり、この概念そのものの本来的な区別に由来する対立ということも、概念内部のものであって、『精神現象学』の立場における対立に逆戻りすることをいみじくない。しかも、かかる概念そのものの区別ないし対立を、その本来の同一性によって統一してゆく弁証法を、繰りかえして進展せしめる概念の自己運動の各段階が、『論理学』叙述の区分すなわち篇別になっているのであるから、このような『論理学』における概念の要素であるところの純粹思惟なるものは、かかる概念的思惟の自己展開が、そこにおいてのみ行われうるところの地盤であるだけでなく、『論理学』

そのものの成立するための原理的な地盤でもある。すなわち、要素とは、このような地盤の意味を、論理的にもっているのである。とするならば、マルクスが『資本論』において、個々の商品をもって資本の要素と規定していることに直面して、その論理学的意味を考えるばあい、右のヘーゲルの論理学的意味によって、その理解を深めておくことをもって、不必要なことを考えることはできないはずである。すなわち、商品としての概念から資本としての概念への思惟的な自己展開は、それが可能であるための地盤としての商品という要素の内部においてのみ行わるべきものであり、この要素的な地盤の外に出ることは不可能なことなのである。したがってまた、このような概念的思惟の自己展開が外に表現されたまでのものとしての体系的叙述も、すなわち『資本論』そのものも、個々の商品を原理的な地盤として、ただ、この地盤の上においてのみ成立しているのである。というように、われわれが考えることが、むしろ正しいはずのものであろう。そして、これが、個々の商品が資本の要素であるということの論理学的な意味でなければならない。

ところで前号第二節において、わたしは、『資本論』の上向的思惟の自己運動が可能であるための要素的地盤として、感性と思惟との矛盾的自己同一性なる論理学的原理を述べておいたが、要素として商品が、この論理学的原理の具体化されたかぎりの形態であるにとどまり、『資本論』なる学的体系が成立するための原理的地盤に二つのものが区別されてあるということには、決してならないであらう。しかし、これを強いて区別するならば、叙述の弁証法的進展のための地盤が要素の商品であるにたいして、叙述に表現されている概念的思惟の自己展開を、叙述から抽象して問題にするかぎりにおいては、感性即思惟なる矛盾的自己同一性が、その要素的地盤であると、いうこともできるであらう。したがって、このように区別されたばあいは、後者が原理となって前者を



規制するという関係が考えられうる。すなわち、商品からの概念的自己展開なるものは、つねに感覚と思惟との矛盾的統一という点に自己を堅持すべきであって、この統一の外へ、単なる感覚的實在だけのものになったり、反対に単なる思惟だけのもの、たとえばヘーゲルの純粹思惟だけのものになったり、要するに何れの側面においても外へ逸脱してはならない、という指導原理の意味をもつものと考えることができる。

以上を要するに、このような論理的分析を取て試みて、これに読者の関心を促しておきたいのも、実は、上述のとおり「資本家的富の要素的形態」を「その細胞形態」とする譬喩的解説だけに頼るばあいには、生物体制と細胞との関係が全体と部分との関係にあることから、ただ、これらの関係の外見の構造に眼をうばわれて、右に述べたごとき本質的な論理学的意味を素どおりして、『資本論』の叙述を讀みすごすことになってしまうであらうし、また、そのように讀みすごす経済学者の多いのが否定できない事実でもあるからである。もちろん生物体制の全体も細胞を要素的地盤として成長しうるものであり、また一般的に全体ということも、要素的な部分を地盤として形成されているものであるからして、現実的資本の諸形態の総体すなわち資本家的富を全体として、端緒的な資本制的商品を、この全体の部分とみて、商品から資本への上向を、要素的部分から全体への進行として理解することは、その本質的な原理として右に述べた論理学的意味を喪失したことはないものである。そして、ヘーゲルにおいても、したがってマルクスにおいても、部分と全体との関係を、この部分が最も單純にして抽象的な規定性にあるかぎりでは、これをもって全体の成立するための地盤として理解していたのであった。すなわち、このような要素としての部分を、それが最も單純にして抽象的な負しい規定性があるがゆえに、この規定性が複雑化し豊かになり具体化してゆく過程のための出発点に位置づけて、これを論理学的な端緒としてい

るのであった。

(2) 『資本論』の邦訳において、この Element なる原語を「原基」とすること、したがって、この訳語を慣用せしめようとする学者が、一部に見うけられるが、この訳語自体としては、原語の論理学的意味を、表象的にはあるが、むしろ伝えられているものといえるであろう。しかし、この訳語の使用者が、その意味の理解においてマルクスの譬論的解説だけに頼っているかぎりでは、その正しい意味を伝えていないわけである。訳語は社会的な約束であるから、「原基」でも「要素」でも、あるいはその他のものでも、よいわけであって、問題は、その論理学的意味を正確に認識して、その孰れかを使用するということである。

さて次に、われわれは、商品から資本への理性概念としての上向的な進展過程そのものの論理学的な理解のために、われわれの論述をすすめるべきであるが、この理解を助けるためにシェーマDを描いてみる。これはシェーマBを、その必要な部分において、さらに単純化したものである。したがって、上向的方法を表示する直線の到達点としての範疇を単に資本としておいた。——ところで、その出発点としての範疇である商品は、マルクスにあってもヘーゲルそのままに、到達点としての資本の概念の即自性にあるものと理解されている。すなわち、端緒の商品は、そこから出発する概念的思惟の自己展開の過程を経て、資本なる概念の具体的規定を、その成果としてもつのであるが、この成果としての資本の諸規定が、未だなんら展開されていない状態、したがって貧しい抽象的な規定性にある単純なものが、端緒の商品である。このいみで、それは、まさに資本制の商品の単純な規定性にあるものである。しかも、かかる単純な規定性のゆえに、したがって同時に、資本制的諸商品の集成としての資本家の富、すなわち範疇としての資本そのものの、単純な規定性にあるがゆえに、これらの要素的諸商品は、端緒としての論理の意味をもちうるのであった。とすれば、これらの要素的にして端緒でもある商品は、

資本の具体的諸規定の未展開なものであるといういみでは、そのまま資本の即自的なもの、資本概念の直接態であることができる。なお資本と商品とは、その实在性の面において形態を異にしているという事実からみるならば、商品は、その自己の外的形態そのものにおいて、資本形態そのままをではなくして、その抽象的な無規定性としての直接態を自己の内容として持っている、というように理解すべきであろう。そして、このことが商品が即自的に資本であり、資本の即自的な直接態が商品であるということの意味である。したがって、商品から資本への概念の発展過程なるものも、商品形態をとっているところの、その内容としての資本の即自的概念が、この形態を棄てて、新なる形態、たとえば貨幣形態をとるというようにして、最後には、自己の概念の具体的規定に一致した形態をとるに到るところの、弁証法的な過程でなければならぬのである。

この弁証法的な過程を、さらに立ち入って述べるならば、一つの形態が他の形態に転化するものは、前の形態の内容が向自的になり自己自らの形態を否定することによるのであるが、このばあい、自己の形態規定を否定的に止揚することによって、より複雑化された新たな形態規定をもつということになるのであるが、要するに、それは、实在的形態と概念的の内容との原始分轄としての判断を、媒介にした概念の自己同一的な運動であり、ヘーゲルの推論と呼んだ論理過程にあると言うことができる。とすれば、商品から資本へという上向的な思维過程は、そのまま一つの推論過程として把握することもできるわけである。しかし、このことについて立ち入って分析することは、ここでは省略するほかないが、ここで先ず問題にしなければならぬことは、この一つの推論過程と見られたかぎりの上向的方法における、その出発点と到達点とのそれぞれの概念の關係についてである。

(3) ヘーゲルは『論理学』の第三部門「概念論」を、A「主観的概念」、B「客観」、C「理念」に区分し、さらにこのAを、

a 「概念そのもの」、b 「判断」、c 「推論」に区分している。そして次のごとく述べている。

——「有論および本質論における諸規定にしても、たしかに単なる思惟の諸規定ではなく、その弁証法的モメントたる移行と、自己および全体への復帰のうちで、自己が諸概念であることを、示してはいる。しかし、それらは限定された概念、即ち、自、己、の、概、念、あるいは同じことであるが、われわれにとつての概念にすぎない。というのは、第一に、各々の規定が、そのうちへ移行し、そのうちで反照し、かくして相関的なものとして存在する他のものは、特、殊として規定されていないし、第二に、各々の規定が、そのうちで統一へ帰る第三のものは、個、別、あるいは主体として規定されていないし、第三に、各々の規定は、普遍ではないから、対立規定におけるその同一性、すなわち、その自由が定立されていないからである。——普通

に概念とは、悟性の規定あるいは単に一般的な表象とさえ考えられており、また概念の論理学も、したがって単に形式的な学問とされ、これは概念、判断、および推論の形式のみをあつかつて、或るものが真理であるかどうかは内容によることであるとして、まったく問題にしないものと考えられている。しかし概念の諸形式は、実際においてこのように表象や思想やを容れるための生命のない器物でないとするならば、それは現実的なものの生きた精神であると考へねばならない。すなわち、現実的なもののうち、これらの形式の力で、すなわち、これらの形式をつうじ、またそのうちで、真理であるもののみが真理である」(E. § 162, A.)。——

このような主張のもとにヘーゲルは、「推論は概念と判断との統一である。それは、さまざまな判断形式が単純な同一性へ復帰したのものとしては概念であり、概念が、同時に実在性のうちへ、すなわち概念のさまざまな規定のうちへ、定立されているかぎりでは、判断である。理性的なものは推論であり、しかも、あらゆる理性的なものは推論である」(E. § 181)と述べている。

いましがた述べてきたように、この上向的な推論過程にあつて端緒的商品は、その実在的形態において資本概念の直接態を自己自らの内容としてもつており、そのかぎりで商品は即目的に資本であるともいふべきであるが、

商品に即目的な内容としてのこの資本の即目的概念が商品その他の諸形態を媒介にして向目的になってゆくという上向過程の最後にあつては、最初の出発点における資本の即目的概念は、いまや商品に初まる凡ての實在的諸形態を棄てさり、資本という實在的形態をとつてゐるのである。すなわち、資本としての資本となつてゐる。概念としては、商品としての資本から出発して、資本としての資本という「向目的に存在する概念」に到達してゐる。いかえれば、商品形態から資本形態への進展において、資本の即目的概念は、その「概念としての概念」に転化してゐるのである。ところで、概念がまだ自己自身にならずして、ただ即目的であることは、概念が自己の實在から向目的に分離する以前の直接態のことであるからして、實在そのものであり、ただ「存在する概念」にすぎない。これが、商品としての資本である。すなわち、その實在的定有においても、資本形態の最も抽象化された單純な要素的形態としての商品形態になり、これに直接的であるわけである。このようにして、商品としての資本とは、ただ存在するだけの資本概念のことである。<sup>(4)</sup>そして、この資本の、ただ存在するだけの概念が向目的に存在する概念に發展する過程が、その實在面において、商品から資本への形態転化の姿をとるだけのことである。したがつて、この實在的な形態の轉換過程をつうじて、概念は、その内容の全体を保つて変らないが、ただその規定性において貧しきものから豊かなものになるだけのことである、と考へねばならない。いかえれば、最初の貧しい規定性にあつては、その豊かな諸規定に到達した概念内容の全体を自覚してゐないだけのことである、その全体的内容を未規定ながら自己のうちに潜在せしめてゐる、というように考えることができる。

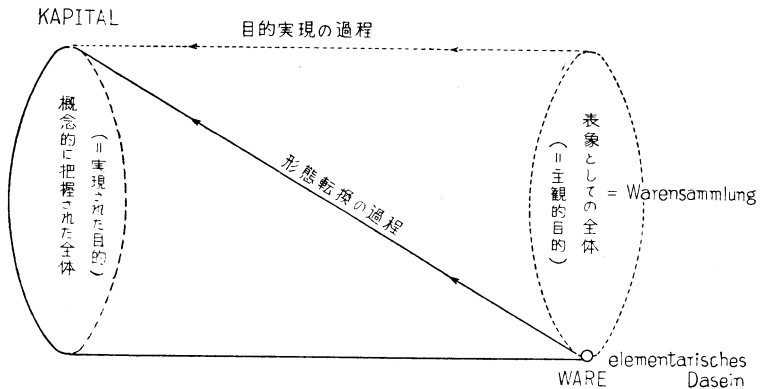
(4) ヘーゲルは、この即目的概念と向目的概念、あるいは存在的概念と概念としての概念との關係を、次のように具體的な例でもつて解説してゐる。すなわち、——「たとえば概念は、あたかもまさに思惟する人間の中にあるそれである。しかし

また、感覚的な動物の中にあるそれや、一般的に有機的個体の中にあるそれも、勿論、意識された概念としてではなく、況んや認識された概念としてではないが、すでに、ここにも、この概念が含まれている。これに反して、無機的自然の中では、ただ即自的な概念であるにすぎない」(G. I. S. 49)。——ところで、ヘーゲルとしては、存在としての概念を対象とするばあいと、概念としての概念を対象とするばあいとを区分して、論理学を客観的なそれと主観的なそれとの二つに分け、さらに、存在的概念を概念としての概念に媒介する領域を反省規定の体系として、客観的論理学を区分するのであって、そのばあいには、論理学を有論、本質論、概念論の三部門に分けるのであるが、このヘーゲルの論理学の体系的区分の問題——これについては『小論理学』八三節を併せて参照——は、ここには関係がない。

ところでヘーゲルは、客観的な実在の形態転換のうちに一貫して自己を保っているところの、この自覚的な独立している概念そのものを、目的と呼んでいる。すなわち「目的とは、直接的な客観性の否定によって、自由な実存に入った向自的に存在する概念である」(E. § 204)と云っている。客観的実在の因果関係において、ただ即自的に存在していた概念は、この目的という向自的な関係に入ることによって、はじめて自由になるというのである。自由であるかぎりにおいて、目的としての概念は、「客観的な素材が相互に磨滅しあい止揚しあう諸過程を支配する力として、自分自身は、そうした過程の外にありながら、しかもその内に自己を保持している」ところの、「有力であるとともに狡智に富んだ理性」(E. § 209, N.)であることを実証しなければならぬ。そして最後には、自己を実現しなければならぬ。この実現された目的としての概念を、ヘーゲルは理念と呼んでいるのであるが、それは、ここでは「実在的な内容は、概念が外的定有という形態で自己に賦与する表現にすぎないもの」になっているからである。すなわち「客観的実在と概念とが絶対的に統一されたもの」になっており、概念もまた即自にかつ向自的な、したがって具体的な真理になっているからである。

さて、このようにヘーゲルの目的論的な理解は、彼の理性的概念の自己発展ということの、したがって、われわれの概念の思惟の自己展開ということの、より本質的な把握に由来するものである以上は、『資本論』の向上的思惟の方法を理性的概念の自己展開というように把握してきたかぎりで、この目的論的解明を、われわれが、ここにこの向上的思惟の方法に適用することは、論理的に当然のことであるのみならず、また、この向上的方法なるものについてのわれわれの認識を、一そう深め、かつ正しきものにするものと考えねばならないであろう。すなわち、端緒の商品から具体的資本への概念的発展は、その実在面における客観的諸形態の転換過程だけのものでは勿論ないにしても、商品形態に即自的な概念が向自的になり、最後に即自かつ向自的になって資本の具体的形態を自己に賦与するという論理を、単に客観主義的に把握するにとどまるならば、これまた一つの抽象的理解にすぎないのであって、それについての具体的な理解を完うするためには、この論理を主体的に、すなわち目的論的に把握せね

Schema D



ばならないはずである。

そこでヘーゲルの目的論の『資本論』叙述の方法への適用であるが、ヘーゲルによれば「目的とは、直接的な客観性の否定によって自由な実存になった向自的に存在する概念」のことであって、客観的実在に直接的に存在する即自的な存在の概念のことではない。概念が目的でありうるための「この否定は、最初は抽象的であり、したがって最初は、客観性もまた単に対立している。そのかぎりで、目的ということも最初は主観的なものとして規定される」(E-I-§ 204)とヘーゲルが言うとおり、たとえ主観的であるにしても概念は、自らの実在性から自己否定的に反省して、主体的に自己の實在的形態にたいして対立の關係に入っていないなければならない。したがって、端緒的商品のばあいにしても、そこに潜在している未展開の、無規定な資本の概念は、いまだ即自的なものでしたがって目的と呼ぶことはできないとせねばならない。しかしながら論理的な歩みとしては、向自的なものは即自的なものからしか出てこないものであり、即自的なものの直接態が自己否定的に自己關係に入ったときに、向自的になるのであるから、向自的な概念としての目的は、逆に、即自的な概念としての實在的形態からしか現れえず、この實在的形態の否定的自己關係として反省的になった概念が、主観的な抽象的な目的になると、われわれは考えることができるであろう。そのかぎりで、端緒的な、したがって要素的な個々の商品においても、その實在的形態のうち目的が、即自的な概念として潜在している、ということが出来る。いいかえれば、即自的な存在としての概念は、向自的に目的たることを未だ自覚しないままに、すなわち無自覚的な目的概念として、潜在しているということが出来るであろう。しかしながら、商品ならぬ傍觀者としてのわれわれにとつて、für uns は、商品に即自的な目的概念を、向自的に把握できる現象学的な論理的關係にあるのであるからして、われわれ



が先きに、資本の具体的概念の全体的内容が、端緒的な商品形態において無自覚的に潜在していると、述べたときは既に、商品自体のこの目的論的な立場に立っていたからこそその言葉であったと、ここに反省してみる必要がある。そしてさらに、この目的論的立場——商品自体に即自的な目的概念をわれわれが哲学者として商品に代つて、向自的に自覚するという立場<sup>(5)</sup>——は、マルクスが、『資本論』を叙述するにあたっての一貫していた立場であったことにも、ここに読者の注意を促しておかないわけにはゆかない。

(5) ヘーゲルは『精神現象学』において「意識の経験の弁証法的運動」を叙述するための方法として、哲学者としての傍観者（あるいは第三者）の役割について述べているが、この現象学的な論理関係については、さらに、これがマルクスに継承されて『資本論』に如何に活用されているかについては、次号の後節において、より詳細に論述する予定である。

端緒的商品においては、資本の概念は未展開な抽象的な規定性にある。しかし、この抽象的規定性から出発して、概念的内容の全体を規定的に展開しつくそうというのが、この出発点に立ったときのマルクス自身の目的であったはずである。そして、目的実現の過程としての叙述をつうじて、その目的を実現したわけであった。ところで、このマルクス自身の目的論的見地は、叙述に表現されている上向的論理そのものの、その本質的契機としての目的論的契機そのものの、マルクス自身の意識への反映でなければならぬ。そのかぎりでマルクスは、この叙述の出発点に立って、端緒的商品の分析について書き始めるにあたって、この端緒的商品に潜在する目的概念を、実在的な商品に代つて、自ら宣明しておく必要があった。というのは、何故に商品から出発するのであるか、商品から出発して何処に到達するつもりなのか、というこの明示を叙述の最初に打ち出しておくことは、これから前進してゆくべき叙述の全過程を読者に予め理解せしめるために、ぜひにも必要な手続きであるからである。

そして、この手続きをとって、全叙述過程の目的とするものが何であるかを明示したものが、いうまでもなく有名な「冒頭文節」であった。全叙述の目的とするものが、資本概念の具体的規定の展開であり、そのことによる資本家の富の概念的把握であることに問題がないとするも、この叙述の出発点においては、この資本家の富と端緒の商品との関係を、読者に予告しておく必要がある。そのいみで「資本制的生産様式の支配する諸社会の富は、諸商品の集成として現れる」と述べたのである。そして次に、この富のわれわれに現象する直接的な形態として商品の分析から叙述を始めるための方法的な見通しを読者に予め理解せしめるために、「個々の商品は、かかる富の要素の形態として現われる」と、なんらの論証もなく断言しておいたのであった。しかし、この論証は、第一章第一節から始まる全叙述において成就されていることは、ことわるまでもない。

ただここで注意しておきたいことは、「冒頭文節」としてのしかかる論証なしの断言的予告が、論理的に如何にして可能であったか、ということについてである。それは、いましがた述べておいたとおり、端緒的商品において既に、資本の具体的概念が、その未展開の無規定性の姿であるにしても、目的として潜在していたからである、とわれわれは理解せねばならないであろう。すなわちマルクスは、このようにして、この商品の実在形態における資本の抽象的な主観的目的としての概念を、叙述の出発点の最初において、まず主観的に先取して、これを商品に代って宣明し、商品自体の概念的自己展開の目的論的な全過程にたいして、予め照明を当てておくという哲学者としての態度を敢てとった、というわけである。ヘーゲルは「目的から理念への発展は、第一に主観的目的、第二に実現の過程にある目的、第三には実現された目的という三つの段階をつうじて行われる」(E. § 206 Z.)といているが、端緒的商品から、その自己展開の過程を経て、資本に到達する『資本論』の上向的叙述は、この

ように三段階の目的論的進展と見ることができよう。そしてまた、この第三段階としての目的の実現において「目的は、その主観性の他者になり自己を客観化することによって、実在と自己との対立を止揚し、もって自己を自分自身とのみ連結し、自己を保存する」。いいかえれば「自分自身のみを結果して、終りに於いて初めの本来の姿を保持するのである」(E. § 206, Z.)とヘーゲルが言うとおりに、われわれの上向的叙述においても、端緒的商品における主観的目的もまた、その実現された成果としての具体的資本においては客観的なものになり、しかも本来の目的性たることを喪失していない、と考へなければならぬ。すなわち、「目的ということは本来、実在の特殊な諸形態にたいして常に包摂的にのみ関係する普遍的概念のことである」(E. § 204, A.)が、かかるものとして、「自己自らのうちに常に規定性を含んでいるものである」が、このことは、実現過程にある目的、および実現された理念としての目的についてだけのことではなくして、最初の主観的目的においても本来的なことと考へなければならぬのである。すなわちヘーゲルも次のごとく言っている。

——「最初に来るのは主観的目的であるが、これは、向自的に存在する概念であるから、それ自身、概念の三つの契機の総体である。これらの諸契機の第一のものは、自己同一的な普遍性であり、いわば凡てを含んでいゝるが未だ何も区別されていない中性的な最初の水である。第二の契機は、この普遍者の特殊化であつて、これによって普遍者は特定の内容を持つようになる。ところで、この特定の内容は、普遍者の活動によって作られるのであるから、普遍者は、この特定の内容によって自己自身に帰り、自分自身と連結し、個別性となるのである。」——

ところで端緒の商品に潜在する即自的な目的概念は、ここに述べられた向自的に存在する概念としての主観的

目的が、そこから出てくる最初の直接態であるから、この主観的な目的概念の三つの契機のうち、第一の普遍性としてのみ実存していて、いまだ第二、第三の契機をただ可能性として秘めているものと考えざるほかないであろう。そのかぎりでもマルクスも、個々の商品の本来の個性としての論理的構造を、それ自身無自覚な個々の商品に代って自覚的に、したがって、商品自体の主観的な目的性を、先取して宣明することが論理的要請されたわけであった。そして、このことは、個々の商品の実在の形態の内において、なおかつ外的なこの形態そのものを包摂するという普遍性、内から外を包むという具体的普遍性——これ自体が端緒的商品の論理構造であるのだが——の立場に立つことであり、そしてマルクスも、この立場に手続き上としても立つことが必要であったわけである。しかも、この要請こそは、無論証な断言としての「冒頭文節」を『資本論』叙述の最初に打ち出しうるための論理的根拠であったとせねばならない。「冒頭文節」の叙述としては、無規定でありえなかつたかぎりでも、上向的叙述過程の最後の到達点において実現さるべき資本の概念規定についての具体的な姿を、先取りして、これを表<sup>(6)</sup>象的に言表したまでのことである。

(6) この「冒頭文節」が『資本論』の叙述においてもつべき体系的意味については、すでに拙著『資本論の学問的構造』所収の「哲学と社会科学」第五節「資本論における哲学と科学との一致」のⅢにおいて述べるところがあった。そこでは、「冒頭文節」をば、資本主義社会における賃労働者の世界観が対象化された世界像の図式であると規定しておいた。カントにおいて図式とは、範疇の制約にしたがいつつ、時間の形式のもとに直観的多様を綜合する先天的規則であったが、それと同じように、『資本論』の上向的叙述は資本主義社会の現実の多様ななかにおいて概念的な自己運動するための規則が、「冒頭文節」としての世界像であると主張したものである。この主張は、現在になお変りはないが、本稿の本節においては、かかる世界像を冒頭に打ち出しうるための根拠を、前者におけるように、『資本論』の学問的意義を歴史的現実のうちに基礎づ

けるという広い立場からでなくて、さらに、その叙述そのものうちにおいて、より深く掘り下げる事ができたわけである。別に「冒頭文節の体系的意味」（『立命館経済学』第二卷第一号）なる拙稿があるが、これは、「冒頭文節」そのものの内容的分析の一篇としての「諸商品集成の感性的直観」の序説の意味のものであって、右の体系的位置づけのための論理的根拠には、目標はおかれていなかったと思われる。

シェーマDは、端緒的商品と成果としての資本と間における右の目的論的關係を、図式化したものである。下向と上向との両線は、実現され具体化された資本概念の全体的内容をいみする円環を底面とすることによって円錐体の曲面に転化したものと見るならば、この底面としての資本概念の具体的に規定された全内容なるものは、端緒的商品において、これを内から包む具体的普遍として、いまだ特殊化の過程に入らない資本概念の無規定にして抽象的な全内容と、実体的に同一であることを示しておいた。この図式において、目的実現の過程は、表象としての資本の全体的内容が概念としての資本の全体的内容に一致することの論証の過程としての上向的叙述そのもののうちに秘むものであって、独立した過程でないこと、いうまでもない。けだし、それは、客観的實在面の諸形態の転換を媒介としてのみ、すなわち、上向的な概念的思惟の因果的必然性のうちにおいてのみ、可能なものであるからである。ヘーゲルも、「概念が目的としてそのうちに実現されているということとは、客観自身の内面にすぎず、客観性は、その下に概念が隠されている外被にすぎない」（B. § 212, Z.）といているとおり、客観性の下に隠された、概念的思惟の合目的性を顕わに示すために、自ら外的に独立したかのごとき図式になつたまでである。もし、これを独立的な過程として見るならば、『資本論』叙述のための原理的地盤としての感性と思惟との統一ということから、逸脱したものとなつてしまふであろう。概念発展の目的論的過程が、その實在

的諸形態の轉換過程から抽象的に分離されて理解されないためには、この轉換が必然的であると思惟されるばあいのその客観的な必然性と、この主体的な合目的性ととの関係が、明かにされねばならない。この説明は次節において成就されるであらう。

## 五、上向過程における必然性と合目的性

ヘーゲルは『論理学』の「概念論」において、概念をもつて実体的必然性の真理であるとし、そのかぎりで、それは本来的に自由なるものであると規定している (Fg. 158)。すなわち「概念は、向自的に存在する実体的な威力として、自由なるものである」とするのであるが、この「向自的に存在する実体」が、客観的実在のうちに自己否定的に普遍性を獲得して、概念に転化したものが、目的であったのであるから、われわれが本節において問題にしようとする必然性、合目的性との関係ということも、概念が自由であるべきだというヘーゲルの主張において、すでに解明されているはずのものと推察されうであらう。ところでマルクスの上向的方法が、ヘーゲルのこの自由なるべき理性概念の發展方法を批判的に継承したものであるかぎりでは、そこに共通する概念的思惟の自己展開ということを理解するために、この概念の自由である<sup>(1)</sup>ということを、自由な自己展開ということの論理構造を、より具体的に把んでおく必要があるであらう。

(1) ヘーゲルの『論理学』が、第一部「有論」第二部「本質論」第三部「概念論」に区分され、それを貫く弁証法的過程が、「有論」の領域では移行であり、「本質論」の領域では反省であり、「概念論」の領域では發展である (Fg. 161, Z.) ということ、そして「概念は有および本質の真理である」(Fg. 159, Z.) として、いいかえれば、「有が自分自身のうちに深ま

り、有の内部としての本質が、この進展によって開示されたものが概念である」（§ 159, A.）として、右の三部門が体系をなしているという事は、周知のことである。そのかぎりではヘーゲルは、「概念論」の領域で、もともと自由であるべきものと規定している概念そのものを、「本質論」の領域における実体という範疇の真理であると規定し、したがってまた、概念が自由であることを実体的必然性の真理であると規定している（E-I § 158）のであった。

要するに客観的実在の世界においては、有限にして独立的な諸実体が相互に因果的に関連しているわけであるが、その一つの実体としての現実的な事物が、他の現実的事物の内において、自己を他のものとしてでなく、他のものを自己自身の別の実存規定として持つという自由をもって、ヘーゲルは、必然性の真理と考えているのである。そして、このようなことは、同時に自己自身の内面を反省的に啓示することによって、自分と他者との本来の内面的な同一性を自覚したうえで、自分および他者の硬い外面的な実存規定を、この自己同一的な普遍性にもとづく新たな一つの全体の諸契機にすぎないものとして、克服することがあつて、はじめて可能なことなのである。すなわち、このようにして、ここに始めて必然的關係そのものが自由に変容する（E-I § 158, Z.）わけである。

すなわち、客観的諸実体の相互的な外的関連のうちには即自的に潜在しているところの無自覚的な全体が、そこにおける諸条件の総体の生きた必然性の力によって、そこから自らを解放して向自的に自己目的々になり、そして、この必然性そのものを止揚しながら自己実現することをもって、概念の自由なる運動と、ヘーゲルは考えているのである。すなわち、「必然と自由とは相容れないものではなく、自由は必然を前提しており、それを止揚したものである」として自己のうちに含んでいる」（§ 185, Z.）と云つてゐる。

このために、まず最初に前提的に注意すべきことは、ヘーゲルにあつて、概念的思惟の自由な自己展開といつても、これが、対象的実在の必然的發展にかかわりなく、それを外部から抽象的に否定する主観的思惟の自由をいみしないことは、明かであろう。必然を止揚した自覚的全体が最初に主観的目的であるといつても、客観的実

体の内部の事柄であつて、第三者としてのわれわれの主観的な意識の事柄ではない。ただわれわれの主観的思惟も、このような客観的な事柄と一致するかぎりにおいて、概念的思惟といわれうるのである。かくて、対象的實在そのものにおける必然性が、われわれによって概念的に思惟されることによって、かえつてこの思惟以前の悟性的に固定された表象的な諸規定が流動化されることになり、一つの事柄から他の事柄への移行そのものが、われわれに容易に理解され、また対象的にも解決されることになるのである。したがつて、またこの移行の必然性も、現実性に転化されるということになる。いかえれば、概念的に思惟されたかぎりにおいて、客観的實在そのものの自己展開も、われわれの主観的意識に現実化され、真に主体的なものとなるということをし、いみする。すなわち、概念としての自由ということは、ヘーゲルにおいては主観的にのみ理解するべきでなく、むしろ客観的に、対象自体にかかわるものとして、「具体的で肯定的なもの」(§ 158, Z.)と理解されねばならないのであつて、しかも、ヘーゲルの概念的思惟のもつこの客観的實在性の面を重要視することが、今のわれわれに必要なのである。そして、このような理解を、われわれに要請しているものとして、ヘーゲルの次のような例解を特に挙げたいと思う。

——「概念の運動は發展である。發展は、すでに潜在していたものを顕在させるにすぎない。自然においては、概念の段階に相当するものは、有機的生命である。かくして例えば、植物は胚から發展する。胚は、そのうちにすでに植物全体をふくんでいる。といつても、それは觀念的にふくんでいるのであつて、したがつて、その發展は、植物の諸部分である根や莖や葉などが、非常に小さい形であるが實在的に、胚のうちに存在している、という風に解されてはならない。これは、いわゆる〈箝語の仮説〉であつて、その欠陥は、觀念的にのみ存在



しているものを既に実存しているものと見るところにある。他方、この仮説の正しい点は、概念がその過程において自分自身のもととどまり、過程は内容上なんらの新しいものを定立せず、ただ形式上の変化を惹き起すにすぎない、ということである」(E. § 161. Z.)。——

ここに概念の発展ということの例証とされた有機的生命の成長について、それがもつところの論理構造を、いま一步すすめて詳しく分析しておく必要がある。というのは、それによってわれわれは、ヘーゲルのいう必然性という範疇の意味を、より正しく理解することができるからである。

さてヘーゲルは、右の例証における胚のなかに潜在している観念的な植物全体を、植物になりうるための実在的可能性にある内容としての「事柄」と呼んでいる。そして、この「事柄」は、これを顕在化せしめるための外的な一切の諸「条件」の総体でもあるのであるが、この「事柄」の内容と諸「条件」の個々の内容との相互独立性が止揚され合一されてゆくところに「事柄」自体の「活動」があるとされ、この「活動」のことをヘーゲルは必然性と規定しているのである。要するに、「あらゆる条件——事柄自身も一つの条件であるが——が現存すれば、事柄は現実的にならざるをえない」(E. § 147) というだけのことである。すなわち、胚は植物にならざるをえないということが、必然性という範疇の意味である。かくてヘーゲルは、「われわれが必然的なものに要求することは、自分自身によってそれが現に有るところのものとして有る、ということであり、したがって媒介されているとはいえ、同時にこの媒介を、止揚されたものとして自己のうちに含むということである」(§ 147. Z.)として、自己の外の他者によって媒介され定立されたものとしての必然性を、偶然的なものにすぎないとして斥けているのである。すなわち、外的諸条件だけが原因となって、胚が植物になったとする因果関係は、偶然的とい

わるべき外的必然性にすぎないのであって、真の因果的な必然性としては、胚と外的な營養的諸条件との合一であるものが、「事柄」として原因になるのでなければならぬのである。

ところで今、このように説明したことから明らかに察知されうるだろうように、「因果関係は、必然性に属しているが、しかし、それは必然性の過程における一側面にすぎず、必然性の過程は、因果性のうちに含まれている媒介を止揚して、自分が全くの自己関係であることを示すものでなければならぬ。したがって、われわれが因果性そのものに立ちどまるならば、われわれは真の因果性ではなく、有限な因果性をもつにすぎない。この関係の有限性は、原因と結果とがあくまで区別されていて、そこに同一性のあるべきことが見おとされている、という点にある」 (§ 153, A.) とすべきである。すなわち、胚が外的諸条件との媒介関係を止揚して自己同一的植物になるということが、真の因果性である。この本来の必然性においても、他のものによって定立されているということは見られうる。しかし、このばあいの他のものとして媒介の根拠になるものは、胚という「事柄」とその成長としてのこの「事柄」の「活動」とであって、外的な偶然的な諸「条件」だけのことではない。このよくな外的な他のものによって定立されたかぎりの必然性は、制約された相対的な必然性であるにすぎない。この相対的な外的必然性をも含めたところの胚の成長という「事柄」の活動全体が、絶対的な必然性として、したがって、無条件的な現実性として、端的に存在する (E-§ 149) わけである。ところで、このような絶対的な必然性は、同時に真の因果性の内容となるべきものであるが、それ自身の論理構造としては、結果としての現実性において、最初の自己を喪失して他のものに移行してしまつたのではない。それは、むしろ最後の自己のうちにおいて最初の無自覚的全内容が、自覚的に実現されているという自己同一的な目的関係にあるものとして、それは他

面において合目的な活動でなければならぬ。いいかえれば、外的諸条件と事柄との総体のうちに潜在する全体的内容が顕在化せざるをえないという客観的な必然性の過程において、顕在化しようとする主体的な目的が実現されているわけである。

(2) ここに述べた「諸条件の総体としての根源的事柄 *Ur-sprüngliche Sache* すなわち原因 *Ur-sache*」は、このようにして、客観的には作用原因 *wirkende Ursache* であるが、主体的には目的原因 *Endursache* であるということになる。これについてヘーゲルは次のごとく述べている。

——「目的原因としての目的と、単なる作用原因、すなわち普通に原因と呼ばれている原因との区別は、きわめて重要である。作用原因は、また顕示されていない盲目的必然に属する。だから、それは、その他者へ移行し、被定立有のうちで、その根源性を喪うものとして現れる。原因が結果のうちで始めて原因であり、自己へ復帰するということは、単に潜在的な事柄にすぎない。言いかえれば、われわれがそれを見いださなければならぬものにすぎない。目的は、これに反して、それ自身のうちに規定性を含んでいるものとして定立されている。いいかえれば、因果関係のうちではまだ別なものとして現れている結果を、自らのうちに含んでいるものとして定立されているのである。したがって目的は、作用のうちで他のものへ移行することなく、自己を保持する。すなわち目的は、自己自身のみを結果するのであって、終りにおいて初めの、すなわち本来の姿を保っている。こうした自己保持によってはじめて、真に根源的なものは、存在するのである」(E-§ 204, A.)。——

そこで、われわれが必然性というばあいには、これが一面において因果的であっても、同時に他面において合目的でもある、という論理構造をもっていることを、われわれは見のがしてはならないことになる。すなわち、事柄全体としての未展開の観念的な内容、いいかえれば胚のうちに潜在する無自覚的な全体が、すなわち目的で

ある。にもかかわらず、この全体としての内容の自己展開の過程としての必然性は、この目的が顕在化しないかぎりでは、盲目的なものと考えられやすい。このことについてヘーゲルも述べている。

——「必然の過程は、相互に全く無関係で何ら内的な関連をもたないように見える個々別々の諸事情および諸条件の存在から始まる。……そこで人々は、かくかくの事情および条件から全く別の或る現実が生じたと言ひ、このような必然の過程を盲目と呼ぶ。これに反して目的は、あらかじめ意識されている内容であるから、目的活動は、盲目でなくて予見的である」(E-§ 147Z.)。——

このように原因としての事柄全体の内容が、意識され、したがって予め規定されていて、この規定どりに発展するかぎりにおいては、かかる内容の自己展開は、もはや必然の過程でなくて概念の合目的な、したがって、そのかぎりで自由な運動であると言わなければならないであろう。このいみでヘーゲルは、さきにも引用しておいたように、「概念は必然性の真理であり、そのうちに必然を止揚されたものとして含んでいる」といったのである。しかし、ここでは、その逆の意味としての「必然性は、即自的には概念である」(§ 147, Z.)ということにわれわれは注意しておくべきであろう。すなわち、概念の段階において顕在している目的活動もまた、必然の段階において即自的に存在していた、と考えられうるわけである。ヘーゲルも「必然性は、概念的に把握されなにかぎりにおいてのみ、盲目なのである」(§ 147, Z.)と云っている。かくて以上を要約すれば、概念的に把握されたかぎりにおいては、必然性は、表面的には単に因果の過程に見えるにしても、これは同時に、その裏面において目的実現の過程でもある、ということを知っておかねばならないのである。

さて、ここで上述のことを認識論の領域に移すことにして、先きの『資本論』における上向的叙述の方法につ

いての問題に帰るならば、この上向的思惟こそは、まさに、資本制社会の全体的内容を概念的に把握することを目的としたところの、必然性のある思惟のことであつた。そして、このいみにおいて、また、それが、ヘーゲルの概念的思惟を継承したものでなければならぬといふことができたのであつた。いかえれば、それは、けつして悟性的な思惟であつてはならず、かならず理性的に自己運動する主体的な思惟でなければならぬ、という理由が、本節において始めて、積極的に述べることができたといふわけである。そこで、われわれは、この積極的な理由を具体的に開示するために、商品から資本への概念的発展を、単に必然性の契機において思惟するだけにとどめることなく、その他の契機としての合目的な思惟としても同時に分析しなければならぬ、ということになる。かくて、前節において、われわれが、上向的な方法の過程を目的実現の過程と見てきたことにたいする論理的根拠もまた、ここで説明されたとすうわけである。ところで、多くの経済学者が上向的思惟の必然性、といふばあ、い、これが概念的発展の一契機にすぎないことの認識を欠いてゐるため、ただに、この必然性の契機のみにかかわるだけでなく、さらに、このばあ、いも、この絶対的な必然性を、外から眺めて相対化し外的必然性としてしか把握できてゐないことを、マルクス主義経済学的方法論的研究の現状と認めないわけにはゆかないのである。このことは、絶対的必然性を、その内容の事柄から主体的に見ることを知らぬところの悟性の立場に囚われてゐることをいみする。

そこで、この悟性主義的な、したがつて客観主義的な偏見<sup>(3)</sup>を克服するためにも、われわれは、マルクスの上向的思惟の必然性ということについては、これを内から主体的に見るための概念的把握においても、内容としての事柄が如何にして自己展開するか合目的性の契機を、ことさらに強調してゆかねばならないことになるであらう。

う。そして、このことのためには、われわれは、ヘーゲルを超えて遠くアリストテレスにまで溯ることを、便宜とするのである。もちろん、ここでアリストテレスを問題にしようとするのは、学問研究の機関 Organon として説かれた彼の論理学——今日の形式論理学へ発展したもの——ないし範疇論についてはなしに、真理が何であり、それが如何にして認識されるかを説いた形而上学における彼の実体論ないし運動論についてである。

(3) 認識論的に、主観はその対象に客体をもつが、この客体的内容としての客観性を把握することによって、主観は、もはや客体に外的に対立することをやめて客体自体の本質と一致し、ここに真理は実現するのである。これは、外的反省の悟性の立場から理性の自覚の立場に転化したことをいみする。そして、この理性的立場にある主観、いかにすれば客体的内容を自己の内容としたところの、すなわち客観性のある主観のことを、わたしは主体と呼んでいるのである。したがって図式的には、主観と客体とは外的に対応するが、主体と客観とは内的に一致するという関係にあるように考えられねばならない。とすれば主体が、主観を契機としてもっているにしても、主観だけのものではないことは明かである。むしろ、主体の他の契機としての客観性だけを抽象して、これだけに固執する悟性主義は、それだけの一面性にある認識主観そのものとして、いかにすれば客観的法則を公式的にしか把握できない主体として、一つの主観主義にすぎない。すなわち、客観主義は主観主義と相表裏している同一のものである。ところで、この一つの主観主義にすぎない客観主義なるものも、特殊科学者のばあいは、それぞれ固有の外的対象を前提としてもっているもので、哲学の領域に見られるような害悪を流すことを免れている。というのは、たとえ経済学者が公式だけの主観で現実に望んで自己満足しているとしても、現実そのものの新たな発展によって反逆されるほかないからである。しかし、害悪を流すにいたらないにしても、思维様式として誤謬であることでは、哲学者のばあいと変りはない。

変動する事物のうちに不変の真理（＝アイドスないしイデア）を認識するには、感覚ないし知覚では不可能であって、概念すなわち理性によらねばならない、とする点で、アリストテレスはプラトンと同一であること、そ

して、プラトンにあって、実体の世界と生滅の世界とは截然として分離され、それぞれに概念的認識と感覺的認識とが対応せしめられていたのたいし、アリストテレスは、概念的に思惟せらるべき実体を、知覚せらるる個物のうちに内在せしめた点で異なる、という哲学史的実事は、周知に属する。ところでアリストテレスが、実体を個物に内在せしめることによって、それを個物の変化と無関係のものでないとしたところに、彼の運動論が成立したのであるが、この運動の成立するための原因として、質料因、形相因、動力因、目的因ないし窮極因の四つを挙げている。たとえば人が何らかの制作をなすばあい、素材ないし原料としての質料因、制作にかかる人の頭脳に予め描かれた表象としての形相因、道具、技術などの動力因、および何のために制作するかの目的因などの四つの原因が分析されうることに問題はない。だがアリストテレスは客観的な自然現象を説明するイデア論としては、質料因と形相因とに限り、動力因と目的因とを形相因に帰一せしめている。これをヘーゲルからのさきの引例によって説明するならば、樹木の成長のために種子の胚が摂取すべき營養物質が、ないし外的諸条件の一切が、質料因であるにたいして、その形相因はアリストテレスによれば胚に潜在する樹木の形相 *Forms* であるとする。そして、この潜在的な形相の概念のうちに、成長のための動力も目的もいみせしめているのである。

かくしてここに、われわれは、ヘーゲルの必然性を構成する三つの契機としての「条件」「事柄」「活動」の諸概念についての原型を、そしてまた、因果的必然性そのものが合目的活動であるという思想の原型を、このアリストテレスの運動論において見ることができらるであろう。ただアリストテレスにおいては、自然現象としての一切の運動が、質料と形相との二要素からのみ成るとし、前者から後者へ進むことが運動であって、この運動において実体は実現せられるとする。したがって実体の未展開の状態が質料であり、その展開されて完成した現実の

状態が形相であつて、しかも、この質料から形相への因果的必然の運動において合目的を見ることができるだけでなく、さらに、この形相もまた同時に、その可能態ないし潜勢状態から、それが「有り能うところのものとして現に有るにいたっている」ところの現実態ないし顕勢状態にいたるといふ運動自体が、目的論的なものとして強調されていると、われわれは見る<sup>(4)</sup>ことができるであらう。

(4) 以上のアリストテレスの所説については、簡単に波多野博士の『西洋哲学史要』に抱った。——なお、ここに述べられる「潜在的形相」の思想については、拙著『資本論の弁証法的根拠』「補説その二、歴史的自然」の(Ⅱ)「弁証法的一般者の物質的自覚」、および、「補説その三、歴史の統覚」の(Ⅱ)「労働過程の歴史の統覚」を参照されたい。

しかし、ここでわれわれは、アリストテレスの目的論的な形而上学にたいするヘーゲルの継承関係を分析する必要はないのであつて、ただ、因果的必然性には、その内容として合目的の運動を含んでいるといふヘーゲルの思想を、より深く理解するために、アリストテレスにまで溯つてみたにすぎないのであつた。とにかく、自然現象においてにせよ社会現象においてにせよ、およそ必然的な運動を構成する因果関係を、その外面的な形式だけによつて把えて、その内容を内面から主体的に見ることのできない悟性の立場では、それは、ヘーゲルのいう外的な必然性に属すべき機械論的、因果律として、定立されるほかはないのであるが、この機械論的因果律にたいしては、必然性の内容としての合目的性もまた、ヘーゲルのいう有限な外的合目的性となつて、相互に外的に對立せざるをえないであらう。

ここに外的合目的性とは、目的論的關係の直接態、ないしは、その外面性における姿であつて、「事物は、それ自身のうちに自己の規定をもっているのではなく、その外にある目的のために使用され消費される手段にすぎな



いと考えられる」ところの効用の見地をいうのである。何かのために役に立つとか、人間は神のために存在するとか、いうばあいのこの外的合目的性こそは、近世の目的論そのものとして、同じく近世の科学によって、その機械論的因果律の立場から批判の対象になったものであった。このような機械論的因果性と外的合目的性との対立関係におちいらぬまえの、両者の本来の同一性による統一こそが、われわれのここで問題にしている必然性ということの概念内容である。すなわち、形式としての因果性にたいして、内容として区別されながらも、なお同一性のあるところの内的な合目的性から見られたところの、必然性の運動について、その論理構造を明かにしようとするのが、本節の意図であった。そこで、これを具体的に解説するために、アリストテレスないしヘーゲルによる例証が必要であったわけである。ところで、これを今、図式に表現すれば、シェーマE(Ⅱ)の(1)となる。

シェーマEの(Ⅰ)は、『資本論』の向上的叙述におけるマルクスの思惟の必然的運動であって、それがヘーゲルの概念の発展の思想を継承したかぎりのものとして、単に悟性主義的に因果関係によってのみ理解さるべきものでないことは、くりかえして説くまでもない。商品から資本への概念的思惟の必然的な自己運動——これに時間的契機を賦与して理解するばあいに、この論理的な自己展開は歴史的な自己展開ともなりうる<sup>(5)</sup>ところの概念的認識の進行——は、したがって目的論的にも理解されねばならないのであるが、その内的合目的性の契機のみを抽象して、これが具体的解明を指して、シェーマEの(Ⅱ)以下による論述が、これからの課題である。

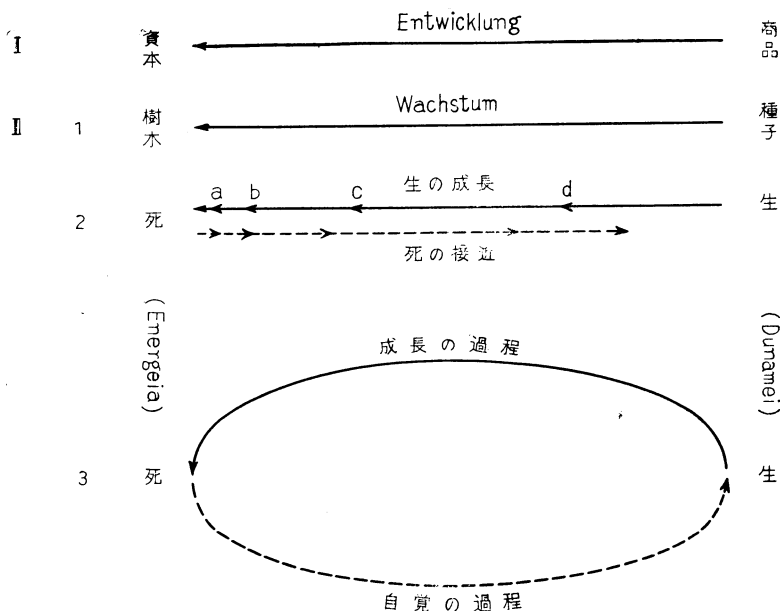
(5) この論理的なものとの歴史的なものとの関連については、次号の後節において別の角度から論及する予定であるが、とりあえず前掲拙稿「歴史的現実と社会科学方法論」を参照しておかれたい。

さて、種子の樹木への成長は、種子と營養物質との因果関係を媒介した合目的的活動であるが、この合目的的

活動だけとしては、それは、アリストテレスによれば、種子における樹木の形相の可能態が現実態になるということであり、ヘーゲルによれば、種子に潜在する未展開の観念的な樹木が展開された現実の樹木になるということである。要するに、出発点と到着点とは同一の実体でなければならぬのであるが、この点、(I)の商品から資本への論理的発展においても、同一の構造にある。すなわち、商品概念は資本概念のエレメントであるというだけでなく、資本関係の具体的展開としての階級的矛盾は、その萌芽形態を商品においてもっているということによっても、資本概念の全内容は商品概念のうちに初めから未展開の潜勢態として含まれており、したがって商品概念は資本概念の潜勢態のことであり、逆に資本概念は自己展開の完了した商品概念である、といわれるべき論理構造にあるわけである。このことについては前節において詳説してきたとおりであるし、したがって(I)の図式もシェーマCのとおりに理解されるべきものである。ところで(II)の(1)のばあいであるが、これは、樹木の実体は、種子からの成長の過程において、潜勢から顕勢へと量的に変化しているのであるが、その一刻一刻において見るとき、それぞれの程度で種子は樹木に成っているものであり、顕勢は潜勢に少しずつ入れ替っていくのであって、最後の段階で急激に潜勢としての種子が顕勢としての樹木に質的転化を遂げるというのではないことは言うまでもない。とすれば、このことは、また同時に、樹木として完成された形相の方が、種子からの成長とともに、一刻一刻と、この成長の方向とは逆の方向に実現されていった、というようにも理解することができる。このことの理解を容易にするためにシェーマ(II)の(2)を試みに見よ。

われわれ人間の生命は有限であり、死が約束されており、したがって、生きてゆくということは死に接近してゆくということであろう。したがって、われわれがaなる老境まで生き延びたとき死が直ぐそこに待っているこ

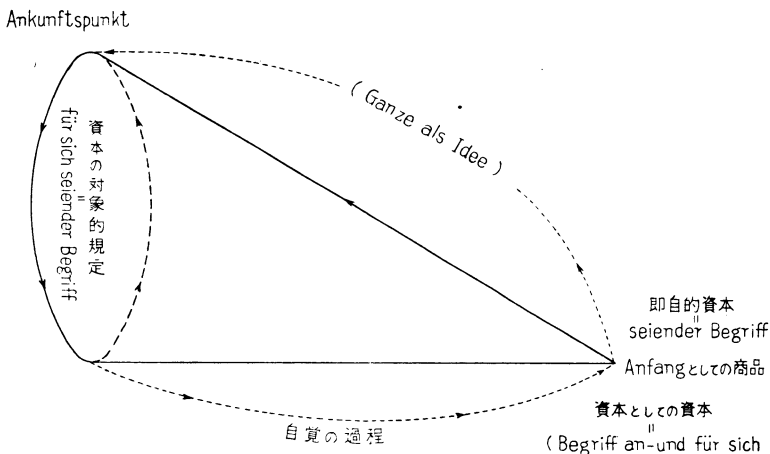
Schema E



とに誰しも諦めざるをえないわけであるが、bからaにまで生きる期間においても、aにおいて始めて予感した死は、bまで接近しているはずであり、そして、cからbまで、dからcまでの間においても、同様だと判断せねばならない。とすれば、さらにdまでの青年期においても死は可能態として接近していたし、ついには、すでに生れた瞬間に死の可能性にあったことの自覚を、われわれは、もたざるをえないであろう。生あるものは必ず死なねばならぬ、ということのような自覚を、われわれの生涯の如何なる段階においても喪わないかぎりでは、はじめて真実の生き方が成就されるのである。いいかえれば、つねに死を覚悟した生き方こそが人生を高貴なるものになしうるわけであるが、このような人生観における

生即死の弁証法<sup>(6)</sup>は、ここでは問題にしないこととする。というのも、図式(Ⅱ)の(1)にしても(2)にしても、潜勢と顕勢との両極の間における量的変化だけが問題として表示されているにすぎないからである。かくて、死は生の完了であると見れば、われわれが生れた瞬間から生き延びてゆくということも、樹木が種子から成長するということも、形相が、その未展開な潜勢態からその顕勢態にまで前進していつて、さいごに完成することであるが、この前進は、これが同時に顕勢から潜勢への後退をいみしたかぎりにおいて、一方的な方向に遠ざかるだけのものではなくて、逆の方向に接近してくるものとして、一つの円環を描くものでなければならぬ。すなわち、前進の目的が到達したことによって、いかえれば到達点に達したというだけのことによって、この運動が完成し終結するのでなくて、この完成において、すでに再び出発点に帰っているものとして、この運動は完了し終結したことになるのである。すなわち、「終りににおいて初めの、すなわち本来の姿を保っている」といういみでの、このような自己完了的な円環は、およそ目的論的運動なるものが持つているところの固有の論理構造であるとなければならぬ。死が生<sup>の</sup>完了であるということは、生きたものが死んでしまったということだけでなく、死において生が完うされた——良き死に方によって生れ効いがあったという意味で——ということではなければならぬのと、同じ論理構造である。これを図式化したものがシェーマ(Ⅱ)の(3)である。そのかぎりにおいて、前節のシェーマDの図形もまた訂正されねばならないことになる。すなわち、上向過程の最後の到達点としての資本の概念内容の全体を円環で描いておいたが、この円環の実現されるのは、この上向過程の終結においてであるに相違ないとしても、描かるべき円環は、上向の出発点への復帰を表示せしめるものとして、本節のシェーマEの(Ⅱ)の(3)のごとき円環にならなければならぬわけである。そこで、これを前節のシェーマDにおいて描け

Schema F



ば、シェーマFのごとくになる。

(6) ヘーゲルにおいては、「直接的な理念は生命であり、ここでは、概念は魂として肉体のうちに実現されている」として、として、次のように述べている。——「生命は本質的に生命あるものであり、また、その直接的にしたがって生命ある個体である。有限性は、ここでは理念が直接的であるために、魂と肉体とが分離し、という規定をもっている。この分離の可能が、生命あるものの可死性をなしている。しかし、生命としての理念のうちにおける、魂と肉体との二つの側面が、異った構成要素であるのは、生命あるものが死んでいるかぎりにおいてのみである」(E. § 216)。——したがって、これらの二つの側面の生ける統一としての生命が全体として合目的であると考えべきことは勿論である。すなわち「肉体から魂が離れざると、客観性の力が活動しはじめる。この力は、有機的な肉体のうちで自己の必然性の過程を開始しようと絶えず待ちかまえているのであって、生命は、それにたいする不断の戦いである」 (§ 219, Z.)。このように「生物は、外的な客観性を自己に同化し、かくして実在的な規定態を自己のうちに定立することによって、いまや即自的に、

類（＝種属）すなわち実体的普遍である」（§ 220）という自己関係をもつ。そこで生物は、「即自的には普遍者であり類でありながら、直接態においては、ただ個体としてのみ現存するという矛盾」にある。だから、「生あるものは死ぬ。死において類が、直接的な個を支配する力であることが証示されねばならないからである」（§ 221, Z.）。——これがヘーゲルにおける生即死の弁証法であるが、それは類の過程の弁証法として、なお客観的な見方である。われわれとしては、この弁証法は、その場所的契機の向自的な自覚によって、さらに主体的に把握されるべきものである。

すなわち、上向の到達点においては、資本の全体的内容は、ただ対象的に規定されているだけであり、そのかぎり概念としては単に未だ向自的にとどまっているにすぎない。この对象的に規定された資本の概念が、最初の上向の出発点における即自的資本としての商品において自覚されたとき、資本概念は始めて即自にして且つ向自的なものとして、完全な具体性を獲得することになるのである。そして、このシェーマFとして新たに描かれた自覚の過程を表示する破線を延長して、出発の端緒としての出発点から到達点にまでに到る円環を描くとすれば、これがヘーゲルの考えられたかぎりの、すなわち理念としての、資本——このように言いうるとしてであるが——の全体的内容にあたるであろう。そして、このばあい、資本の全体的内容の表現としてのこの円環的体系は、ヘーゲルと同じく理念として発展的な過程性にあることになり、この過程的なことを、上向を表示する実線が示していることになろう。しかし、このような理解は、あくまでヘーゲルからの単なる類推であって、『資本論』の体系としては後節に分析的に解明されるとおり、シェーマFとは異った図式になるのであるが、とにかく、ここでは、学的体系を成立せしむべき思惟の円環運動なるものが、端緒に復帰することによって始めて描かるべきものであることの認識が、ここで予かじめ注意されたわけである。

上述来、アリストテレスの潜勢から顯勢への目的論な発展の理論を、一步すすめて思弁的に解明してきたのであるが、これによって、われわれは、およそ合目的的發展がその論理構造としては円環運動を形成せざるをえないということの指摘がなされたわけである。しかも、ヘーゲルの概念的運動の發展が、その必然性によって自己展開するならば、そこに見られる因果的関連は合目的な發展によって貫かれていて、という以前の指摘を、ここで想い併せるならば、ヘーゲルの概念的發展も、またしたがって円環運動をせざるをえないはずのものとして、われわれが予め理解しうるための準備が、上述来の分析で成就されたわけである。ところで今、ヘーゲルの概念的運動ということをも、概念的思维の領域にかぎるばあいは、その円環としての論理構造は、ヘーゲル哲学固有の意味をもつてくるのである。いうまでもなく、それは学的体系性という重要な意味をもつてくる。逆に言えば、概念的思维が必然的に円環運動をすることによって始めて、それが体系的でありうる<sup>(7)</sup>とされているのである。すなわちヘーゲルにあつては、これも既に第三節において述べておいたことであるが、概念は、それが理念の一契機にすぎないものとして、この理念の要請として自らに照応する実在性を自分自身によって賦与せざるをえない必然性があるのであつて、実在から離れて形式的に存在しうるものではありえないものであつた。概念の、したがつて概念的思维のこの必然性が、円環運動をなし、そして学的体系をなす、とされているのである。したがつて、理念をもつて哲学の対象とするヘーゲル哲学は、全体として円環的運動として展開され、そのかぎり彼の全哲学は体系的である<sup>(7)</sup>というわけであるが、さしあたり『法の哲学』における次の言葉によってだけでも、このこと<sup>(7)</sup>の理解は、不可能なことではない。

——「理念は、それが端緒においては、ただ抽象的概念にすぎないからして、つねに自己を自己のうちに分岐

し発展的に規定してゆかねばならぬ。しかし、この端緒的な抽象的概念は、けっして抛棄されるのではなく、むしろ、それは常に自らにおいて専ら豊富になってゆき、かくして最初の（貧しい）規定が最も豊かなものになるのである。かかる過程を経て、最初の単に即自的に潜在する諸規定が、その自由な独立性に到達する。……ゆえに、概念が或る新たなものに到達する、ということはできない。かえって、最終の規定は、再び最初の規定に合致するのである。」——

これだけの言葉において、概念的思惟の端緒の問題だけでなく、ヘーゲル哲学に固有の円環的な体系の問題が、解明されている。そして、ここにおける「最終の規定が再び最初の規定と一致する」という円環そのものが、最初の貧しい抽象の規定が、自らに照応する実在性を自分自身によって自分自身に賦与しようとする目的——かかる必然性における合目的性——のために、自らを豊にし具体化してゆくという目的実現のための必然性に根ざしていることも、上述来のアリストテレスの運動論の分析から、われわれは容易に推察されるところであろう。そして、またヘーゲルも、かかる必然の過程において目的概念が自己を保持すべきかぎり「概念が或る新たなものに到達することができない」と主張しているものと見なければならぬであろう。

(7) この問題については次節で明かにされるはずであるが、目的論的な契機に由来するところのヘーゲルの円環的な体系的系は、その円環運動の自己完了性のために、完結的である。この完結的であるという性格こそは、『資本論』の体系との比較において、もっとも重要な規準なるべきものである。そして、この点についても、次号の後節で明かにされるわけであるが、いまここで、それらの性格の差異だけについて予め述べておくならば、ヘーゲル哲学の体系的性格が、完結的である点から、それを「閉ぢられた体系」と呼ぶならば、これにたいして、マルクスの『資本論』ないし全経済学的体系の性格は、



未完結なものとして、「開かれた体系」とされなければならない。マルクスにおける学的体系性が如何なる意味において未完結であるか、ということの解明こそは本稿の最後の目標でもあるが、これについては拙著『資本論への私の歩み』の所収の論文、および前掲拙稿「資本論の学的体系性」を参照されたい。

しかるにマルクスは、『経済学批判』『序説』において、「近世の経済学の諸体系を成立せしめるにいたったところの上向的思惟方法」をもって、「学問的に正しい方法」であると確かに述べていたのであるが、このばあい、実は、いまここに予備的に理解してきたごときヘーゲルの円環的な体系を必然的に予想した概念的思惟の自己運動をこそ、批判的に継承すべき「学問的に正しい方法」と理解した上での立場から、理論経済学の上向的方法を、すでに確立されている自分自身の「学問的に正しい方法」に引き揚げるいみで評価しただけのことであった。いかえれば、たとえば古典経済学の上向的方法にたいしては、ヘーゲルの思惟方法のもつ体系的必然性を欠いてゐるかぎりで、「学問的に不十分な方法」とマルクスは見ていたのである。このことは本稿の第二節において予め指摘しておいたところであるが、この継承関係についての完全な解明は、なお後節をまつて果されねばならないものである。そのかぎり、この解明を果すためにも、ヘーゲル哲学体系を必然的に予想する概念的思惟方法なるものが、一般に経験科学を理論体系たらしめる上向的方法なるものと、相互に如何に差別されているか、ということが具体的に理解されておかねばならないであろう。そしてヘーゲル自身も、彼の概念的思惟方法を哲学固有の「唯一の眞実なる方法」として展開するにあたっては、経験科学が、現象世界の背後の本質の世界において抽象的に固定された悟性的概念をもって、現象する諸現実を説明せんとするばあいの思惟の運動を、この運動の方法を、批判することから、その論述を始めているのである。

しかし、この前提的な問題——經驗科学と哲学との、あるいは古典経済学の上向的方法とヘーゲル哲学の概念的思惟方法との比較の問題——を説明するためにも、さらに、その前提として、まず第一に、ヘーゲルの概念的思惟が如何なる意味で必然的に円環運動をなすことになるかという問題を、次に第二に、この思惟の円環運動が如何なる意味で体系であるのかといった問題を、正確に理解しておくことが必要であろう。ところで本節では、右の第一の問題をアリストテレスの目的論を媒介にして予備的に理解してきたわけであるが、特に第二の問題については本節におけるごとく単に概略的に見通しておくというにとどめるわけにはゆかない。そこで、ヘーゲル自身の論述に沿うて、この第二の問題点に重点をおいて右の前提的問題にすむために、次節に移ることにした。

## 六、ヘーゲルの概念的思惟の円環運動

近世に発生した経済学にかぎらず、一般に經驗科学において、理論的にして体系的な叙述を始めようとするばあいは、その下向的な帰納的分析によって、直観と表象との対象としての「現実の出発点」たる具体的現実から、普遍的な諸規定を抽象し、これを悟性的に固定して暫定的な真理と認めた後に、この仮説が果して最初の出発点としての具体的現実を説明しつくしうるか否かの検証の過程としての、悟性的な抽象の普遍性からの演繹によって特殊化してゆく上向的思惟の方法を、採るほかはないのである。マルクスが『経済学批判』『序説』の第三節で述べたこと——「十七世紀の経済学者たちは常に分析によって若干の规定的な抽象的諸関係、たとえば分業、貨幣、価値、等々を発見することに終ったのであるが、これらの個々の契機が多かれ少なかれ固

定され抽象化されるにいたるや否や、労働、分業、欲望、交換価値のような単純なものから、国家、諸国民間の交換、世界市場にまで向上してゆくところの、経済学の諸体系が始まった」ということ——は、経験科学一般に共通する理論的体系化の方法を、特殊な一つの経験科学としての経済学に適用して述べたまでのものにすぎなかった。ところで、近世の経済学が理論体系をもつためのこの上向的な方法を、マルクスが「学問的に正しい方法」であると賞め揚げたのにたいして、ヘーゲルは「かかる方法は蓋然的な方法」というほかはない。しかし、この蓋然的思惟の方法にも正しい方法論についての自覚が秘んでいる」と指摘しているのである。経験科学の理論化ないし体系化のための方法にたいするマルクスの右の評価の意味については、すでに本稿第二節において、それについての叙述を取りあえず分析的に吟味しておいたが、マルクスの上向的思惟は、たとえば古典経済学のそれとしての蓋然的な検証の意味をそのままに継承したものでなくて、ヘーゲルの理性的な概念的思惟を批判的に摂取したものである、とするわたしの主張は、むしろ右の体系化の方法についてのヘーゲルの評価を一そう深く知ることによって、かえって一歩すすめた内容的な理解を讀者に期待せしめることになりそうである。そこで、この評価の理由を、ヘーゲル自身から直接に聞くことにしよう。

ヘーゲルによれば、右の蓋然的な方法は、まず第一に、神や事物の認識にとりかかる前に、その認識能力を吟味しようとしたカントの無意味な努力を斥けている。あたかも「水に入る前に泳ぎを習うように、認識する以前に認識しようとすることは馬鹿げたことだ」から、理論的科学は、とにかく仮定的な蓋然的な真理から、  
☞ nur mit einem hypotetischen und problematischen Wahren 思惟を始めて見るといふ態度を示している（E-§ 10, A, G. L.-S. 62.）と評価するのである。次に内容的に、——これが大切なことであるが——このような理

論的思惟においては、これが如何なる方法で進行するかは別として、絶対に真なるものとせられるものは、この論理的進行の結果にしか現れえない、ということ的前提している。ところがこの前提そのものには、「最後が真理であるならば進行の最初においても真理であつたはずであるにしても、この最初の真理は、最初のものである」という点で、客観的にみれば必然的でなく、また主観的な面からみれば未だ認識されていないものである」(G. L. S. 63)という思弁的な意味を秘めている、とヘーゲルは評價するのである。すなわち、この思弁的意味の自覚がないかぎりにおいて、一般に経験科学は、その下向的分析過程においてのみならず、その上向の演繹的思惟もまた、トライ・エンド・エラーの探求の過程でしかありえないのだ、と注意しているのである。そこで今、われわれには、ヘーゲルが理論科学のお悟性的な上向的思惟に秘むとしたところの、思弁的な意味が如何なるものであるかをヘーゲル自身から聞くことが、次に必要なことになってくるであろう。すなわち、彼によれば、

——「哲学においては、前進 *Vorwärtsschreiten* はむしろ後退 *Rückwärtsgehen* であり、また基礎づけ *Be-gründen* なのであつて、この基礎づけによってはじめて前に出発点とせられたものが、単に勝手に仮定されたものでなくて、実際は一面からいえば真理そのものであり、また一面からいえば最初の真理である」——

というのが、ここにいう思弁の意味のことであるが、この思弁の意味は、理論科学における上向的思惟方法にたいするヘーゲルの批判の原理となるものでなければならぬ。したがつて、われわれにとつても、近世の経済学諸体系の上向的方法を批判する今のばあいに、まさにこの思弁的意味の自覚こそが最も必要なものであるということにもなる。とすれば、この点で既にヘーゲルは、マルクスへの途をつけていたことになるであろう。ただヘーゲルとしては次のように主張してのことであつたのである。——「結果がはじめて絶対的根拠として出てく

るからといって、この思弁的認識の進展は、暫定的というようなものでもなければ、また蓋然的なもの、仮説的なものなどでもない。その進展は、事柄と内容そのものとの本性によって規定されるのでなければならぬ。その端緒は、単に任意のものや一時的に仮定されたものというようなものでもなければ、また任意に現象的なものを持ってきて勝手に前提として立てておいて、後で進行過程を吟味してみても、これを端緒としてきたことの正しさが、やっと証明されるといったようなものでもない」。——すなわち、思弁的思惟そのものの直接態が端緒であって、したがって、この端緒が既に真理なのである。ただ端緒の真理であるかぎりにおいて、無規定であり最も貧しい内容のものであるというだけのもので、だからといって真理でないとはされべきものではない。その単純な内容が自己のうちの潜在的諸規定を自ら展開してゆくという必然性が、思弁的思惟の進行過程である。それにしても、この進行が、その端緒的真理の基礎づけの過程であり、自己論証の過程であることは、自明のことであらう。かくてヘーゲルは、概念的思惟の進行過程の論理構造について、次のごとく述べたのであった。

——「前進とは、根拠 Grund への、根源的なるものと真なるものとへの復帰 Rückgang であって、端緒となるものは、この根拠に依存するものであり、また事実、端緒はこの根拠によって産み出されたもの hervorgebracht wird である」ということが肝心な点であることを、われわれは認めざるをえない」（S. 62）。しかし「他面ではまた、運動の根拠としてその復帰点であるものが、導き出されたもの、その結果 Resultat であると見ないわけにもゆかない。この点から見ると、最初のものからまた根拠であって、最後のものは、かえって導き出されたものである。すなわち、最初のものから出発して、正しい推論によって根拠としての最後のものに至るのであるから、この根拠こそ、（根拠づけられたものとしての）結果である」（S. 63）。

すなわち、端緒は、ここからの思惟の進展において最初の真理であることが論証されてゆくわけであるが、この直線的な進行は、最初の真理が到着点における最後の真理によって根拠づけられるだけでなく、逆に、最初の真理が根拠となって最後の真理を導き出していく過程として、それ自身のうちで円環運動 *Kreislauf* をなしているのである。いいかえれば、概念的思惟の直線的な進行は、或る特定の現実に着したことによって完結するのでなくて、この進行自体が、その過程の如何なる点においても、「最初のものが最後のものであり、最後のものが最初のものである」という円環を描いているがゆえに、常に完結的なのである。そのいみでヘーゲルは「学にとつて根本的なことは、単に直接的なものが端緒であるということではなくて、むしろ学の全体が、それ自身のうちで円環運動をなしているということである」(S. 11)と言っている。そして、この概念的思惟の円環的な自己完了こそが、ヘーゲル哲学に固有の体系性をなすものであるが、この円環運動をさらに分析的に規定して、ヘーゲルは次のごとく述べている。

——「端緒をなすものからの進展は、ただ、この端緒の規定そのものの進行であると見られるから、したがって端緒をなすものは、後続の全過程の根底に存し、それから消えさることはない。進展は、単に他のものが導き出されるといふことにあるのではなく、また全く他のものに推移するということでもない。そんな推移の起るばあいには、その推移は、また再び止揚されてしまふのである。それゆえに哲学の端緒は、あらゆる後続の展開のうちに現存し、自己を維持しているところの基礎であり、後続のそれぞれの規定のうちに何時も必ず存在しているものである。しかし端緒は、また、この進展を経ることによって、それが端緒としてもっていた一面性、すなわち一般に直接的なものであり抽象的なものであるという規定を、失う。かくて端緒としての直接

性は、同時に媒介されたものでもある、ということによって、学の進展が描く直線は円環となる。同時にまた、端緒をなすものは、その出発点においては、まだ未発展のものであり、無内容のものであるから、それは、端緒のうちでは本当に認識されていないものであり、学が始めて、しかも学の全展開によって始めて、端緒の完全な内容に充ちた、認識——また始めて本当に基礎づけられた認識——となるということが云えるのである」(S. 63-4)。——

すなわち思弁哲学における最も重要なことは、その概念的思惟の運動が円環的であり、自己完了的であるという事、したがって、かかるいみで体系的であるということであって、この円環運動の端緒が何であるべきかという事は逆に自己完了的な思弁の世界から自ら決っていることである、とヘーゲルは主張しているのである。そこで、この主張にしたがって、端緒の問題についての一そう突きこんだ理解<sup>(1)</sup>は後節に譲り、ここでは概念的思惟そのものの論理構造を、より立ちいって吟味することに重点をおかねばならないが、右に引用してきたヘーゲルの数個の文章によって、この論理構造を図式化すれば、シェーマGのごとくに描きうるであろう。

(1) 以上のヘーゲルからの引用は、主として『大論理学』第一巻「有論」の「何を学の始めとなすべきか」という冒頭の論述からのものであるが、それらの引用文の中で見られるとおり、ヘーゲルの学の端緒についての規定は、いうまでもなく思弁哲学の世界のうちにあることが前提になっている。したがって、思弁的思惟の直接態というだけの規定である。しかし、この規定をマルクスの経済学に適用して、商品は、資本の直接態として、最も単純にして抽象的なものであり、そのかぎりで学としての経済学の端緒である、というように理解するだけににとどまるならば、マルクス自身において商品を如何にして学の端緒にせざるをえなかったかの主体的理由を、解明しえたことにはならないであろう。この点については、次号において問題にせざるをえないので、ここに註記して、これだけの注意を予めしておきたい。

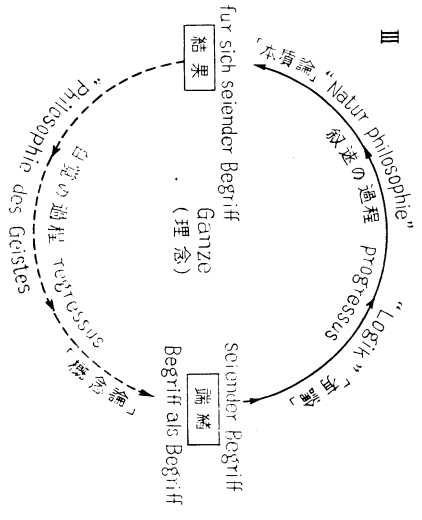
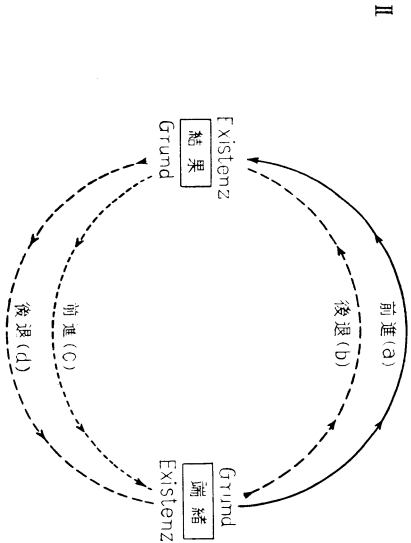
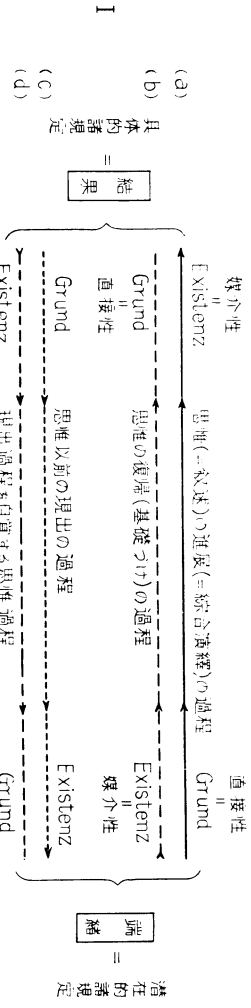
すなわち、その図式(Ⅰ)は、概念的思惟の進行を直線的に表示したばあいの論理的意味を、四つに區別して並べてみたものである。ヘーゲルの思弁的思惟の進展は「事柄と内容そのものとの本性によって規定され」ているものであるが、その進展の出発点にあっては、その到達点において顕わに現実化される具体的諸規定が、いまだ全く展開されていない潜勢態として、無規定、無内容であるとするのが、ヘーゲルの端緒についての規定である。そして、この状態こそは思弁的思惟の直接性の状態であるが、そこから自己運動を始めて、事柄の全内容を規定的に自己展開してゆくことが、概念的思惟の進展過程である。これを実線で図示しておいたのであるが、このばあい端緒は、概念的には無規定ではあっても事柄の全内容の直接態であるからして、真理であることには問題はなない。しかし真理は、事柄の具体的諸規定の全部が総合的に展開されつくされる到達点においてこそ、現実的であるからして、思弁的思惟の進行の一步一步は、最初の抽象的な真理が最後の具体的真理に一致することを論証してゆく過程でなければならぬ。すなわち、概念的諸規定の漸次的な自己展開という演繹の過程(a)は、同時に基礎づけの過程(b)である。ヘーゲルは、二つの過程のこの同一性の関係を、進行即復帰、あるいは前進 Progressus 即後退 Regressus と呼んでいるのであるから、図式(Ⅰ)において、復帰ないし後退の面を破線として、進行ないし前進の面を表示する実線と切り離して図示してあるにしても、これらの両面ないし両過程が同一の思惟過程の二つの契機にすぎないということは、説明を要しないであらう。しかしこのばあい、一方の契機としての後退の過程は、それが基礎づけとして根拠への復帰であるかぎりでは、他方の契機、すなわち、端緒を根拠とし、そこから演繹的に進展していつて具体的諸規定を実存せしめるにいたる前進の過程とは、その方向は同一であるにしても、そこにおける根拠とそこから導き出されたものとの関係は、したがって直接性と媒介性との関



係もまた、転倒されていると考えねばならない。

ところでヘーゲルは、前進過程と同一なるものとして相表裏する後退過程が、その根拠と実存との関係を転倒せしめているという、このことからして、このような概念的思惟以前に、その後退的思惟が復帰してゆく根拠そのものによって、前進的思惟の根拠としての端緒が、事実として「産み出されていた」ということの認識を、肝要なこととして指摘しているのである。そこで、この思惟以前の実存的根拠から端緒が現出していく過程(c)を、点線で表示し、さらに、この現出過程を追思惟するところに考えられべき自覚の過程(d)を、復帰の思惟過程と同じ破線で表示するならば、ここでも、前と同じ論理構造を明らかにすることができる。すなわち進行の方向は、結果から端緒へというように逆になるが、実存的な現出の過程とその自覚の過程とは、直接的な根拠とそこからの媒介的帰結との位置関係を、その同一の進行方向において転倒しているわけである。したがって同時に、思惟以前の現出の過程は、思惟の進展の過程と方向を逆にしていながら、これと同じく前進であり、そしてまた、復帰の過程も自覚の過程とは逆の方向において共に後退している、ということが明示されている。そこで「最初のものが最後のものであり、最後のものが最初のものである」という構造が円環運動をいみしているといふヘーゲルの論理にしがって、二つの前進と二つの後退とを結んで円環に描くと、図式(Ⅱ)となるわけである。さて、この図式(Ⅱ)において、前進としての概念的思惟の進展過程の半円を、ヘーゲル哲学における体系的な叙述の過程であることに問題はないが、この叙述の背景として考えるべき論理を、単に、その他の半円としての思惟以前の現出過程のみにかぎることは、図式によっても不十分であることは明かである。したがって、破線で示されている今一つの後退の円環運動の全体をも併せ合せて、これをもって叙述過程の全背景の論理と考

Schema G



えねばならないであろう。というよりは、思惟以前の現出過程が思惟のうちに体系的に表現されたものが、この後退的な自覚および復帰の円環運動であつて、そして、さらに、この復帰の半円と相表裏する進展的思惟の半円だけが直接的に外化したものが、体系的な叙述の過程であると考えべきであろう。しかし、それにしても、叙述が体系的であるのは、そこに表現される思惟運動が円環的であり体系的であればこそであるからして、右の破線で示された後退的円環運動を背景の実体とする演繹的な思惟の自己展開こそが、ヘーゲル哲学の体系性を成立せしむるものと考えねばならない。

ところで、このような図式を媒介にした思弁的分析が、ヘーゲル哲学の体系的諸思想を説明するために、果して如何なる意味をもつものであるかということが、次に、われわれの問題になつてくるわけであるが、このばあい、このような思弁的分析をば、この問題に係りなく続行することは、あたかもシェマチスムスと呼ばれるべき偏向におちいることにもなるであろう。そこで、この図式そのものの思弁的分析は、思想内容の解明に役だつべき程度の程度にとどめておいて、さらに、これを簡略にして、(a)前進的な思惟の自己展開と(d)後退的な自覚の深化とを連結した円環をもつて、叙述の背景に横わる論理構造としておくことにしよう。しかも、(a)の思惟の進展がそのまま叙述の進行に直接的に同一であるかぎりでは、ヘーゲルの哲学体系は、叙述の過程と自覚の過程との円環運動である、とすることもできるであろう。そして、このことを図式化したものが、図式(Ⅲ)である。

以上われわれは、ヘーゲルの概念的思惟の運動が必然的に描くところの円環的な論理構造を、図式によつて理解してきたのであるが、われわれのこの理解が一つのシェマチスムスに終らないためには、この円環的な思惟の自己運動が如何にしてヘーゲル哲学を体系的なものにしているか、という今ここに直面している問題点を見きわ

めておかねばならない。

すでに述べてきたようにヘーゲルは、理念をもって哲学の対象としており、この理念が概念と実在との統一であるかぎり、概念は、自らの現実的定有を獲得するまで自己の最初の直接的な抽象性を止揚せざるをえないという必然性にあつたわけである。したがって、この概念的思惟の自己展開の過程こそ、また、ヘーゲル哲学の固有の対象であるといえるわけである。このことについてヘーゲルは、一步すすめて次のごとく述べている。

——「哲学は、その仕事を始めるばあい、他の諸科学と同じように、やはり主観的な前提から始めなければならぬように見える。すなわち、他の諸科学がそれぞれ特殊な対象を思惟の対象としなければならぬように、哲学もまた、思惟を思惟の対象としなければならぬように見える。しかし哲学のばあい、思惟が自分自身にたいして存在するようになり、これによって、自分自身のために、その対象を自ら産出し、かつ与えるという立場に立つということは、思惟の自由な行為によって行われる」(E. § 17.)——と。

そして、この主張のもとに、他の諸科学が必ずそれぞれの対象をもっているのと同じように、「思惟を思惟の対象とする」かぎりの哲学を、ヘーゲルは、まず『精神現象学』として展開し、次に、この学の結果として出てきたところの、すなわち自然的意識と対象との対立関係が完全に止揚されたところの、純粹知識の領域を『論理学』として展開したということについては、前節において述べておいた。そして、この純粹知識とは、対象と意識との現実的な対立のなくなったかぎりの統一として、現実的内容から離れた単に主観的に抽象的なものでなく「具体的な生きた統一」(G. I. S. 48.)である。このような統一を要素的地盤として「思惟が、自分自身を対象とし、自分自身のために自分の対象を自ら産出してゆく」という自己運動をば、学の内容としたものが『論理

学』である。この純粹思惟は、また純粹概念とも呼ばれているが、これもまた、客観的實在から離れた抽象的な、一面的に主観的なものと考えらるべきではなく、かえってかかる純粹概念こそが、眞の實在と考えられるものでなければならぬものなのである。しかも、ただ實在として考えられたかぎりの概念は、その即自的なもの、直接的なものにすぎないのであって、この概念は最後には概念として把握されねばならない。しかし實在としての概念が、概念としての概念にまで自己展開を遂げるためには、實在的概念自体の要素としての本来の統一がたゞ破れ、ここに生じた対立——實在と概念との対立——が再び統一されることがなければならぬ、ということになっている。

このような概念の發展過程は、最初の実在としての即自的な概念が自己反省して向自的になり、その直接的統一すなわち同一性が区別ないし対立の關係に轉化することであり、しかるのちに、この向自的概念における反省諸關係を媒介的に止揚して、本来の要素としての統一に——しかも具体的に規定された豊かな内容のある統一に——復歸するという弁証法の過程である。そして、この弁証法的發展の順序にしたがって、『論理学』が「有論」「本質論」「概念論」に区分されているのであるが、このことも周知であらう。ところで、この『論理学』としての概念の發展過程は、「概念論」の最後において「有論」の最初の直接性に歸るいみで円環的な運動であり、そして、このような円環運動として学的体系をなしていることを、われわれは知るのであるが、これは、ヘーゲルの理念のもつ本来の論理構造にもとづくものであることについては、その図式的解明のときに明かにしたとおりである。したがってヘーゲルの全哲学体系もまた、右の自己同一的な思惟としての理念が、その円環運動をさらに拡大して展開するばあい成立するということになる。すなわち「理念は、自己を自覚するために、自己自

らを自己に対峙させながらも、この他者のうちで自己のもとにあるような働きをする」のであるが、そのとき即自かつ向自的な理念の学としての「論理学」と、ここに見られた本来の姿を喪失した理念の学としての「自然哲学」とが、成立する。さらに、この自己喪失から自己のうちへ帰る理念の学としては「精神哲学」が成立して、この三つの区分——それぞれ固有の形態をもちながら、これらの諸形態は、他の形態に移行するという流動的契機を内在せしめている三つの領域——をもって、ヘーゲルは全哲学体系となしているのであった。このばあいも「理念は、自然のうちでは自己疎外の状態にあるのを、精神のうちでは、向自的に存在しながらも、即自かつ向自的になりつつあるもの」(E. S. 18)と規定されている点から明らかのように、再び「論理学」の対象としての最初の直接的な自己同一性に復帰する、という円環運動をなしているのである。——以上の体系的な諸区分の図表における位置づけとしては図表(Ⅲ)を見よ。——かくてヘーゲル自身も次のごとく述べている。

——「哲学もまた、その仕事を始めるにあたって、他の諸科学と同じように、やはり主観的な前提から始めなければならぬように見える。すなわち、他の諸科学が特殊な対象を思惟の対象としなければならぬのと同じように、哲学は、思惟を思惟の対象としなければならぬように見える。しかし哲学のばあい、思惟が自身自身にたいして存在するようになり、これによって、自己自身のためにその対象を自ら産出し且つ与えるという立場に立つということは、思惟の自由な行為によつて行われるのである。のみならず、直接的であるように見えるこの立場は、哲学の内部において、成果、しかも哲学の最後の成果とならなければならない。したがって哲学は、そこで再びその端緒に到達し、自己のうちに帰るのである。かく哲学は、自己のうちへ帰る円環であり、他の諸科学のような端緒をもたない。したがって哲学の端緒は、哲学しようとして決心するばあいの主観に

関係をもつにすぎず、哲学そのものには関係ないのである。」——

ここに明瞭に述べられているようにヘーゲルは、マルクスが十七世紀の経済学に認めた「現実的出发点」をもたないわけである。そして、感覚と表象とから解放されて、「純粹思惟の自由な行為によって」かかる円環運動を行う、というのである。したがってまた「哲学の端緒ということも、哲学しようと決心するばあいの主観に關係をもつにすぎず、哲学そのものには關係がない」とヘーゲルは主張する。この主張には、「哲学が何であるかということとは、ただ、哲学せんと決心したものであるのみ、そして、哲学していることそのことよつてのみ把握されうる」という大切な思想<sup>(2)</sup>が含まれているのであるにしても、經驗科学の「現実的出发点」を斥けるところの理念の円環運動が、はたして眞に歴史的、現実的、論理になりうるであろうかという疑問を、われわれはここに提起することができる。理念は実在と概念との統一であるといつても、この理念がかかる自己運動をなしうるための要素は、感性的対象と自然的意識との対立をヘーゲルのに止揚したことよつて、この外的対立を超越したはずの純粹思惟にすぎなかつたからである。

(2) ヘーゲルは、普通の意識、すなわち自然的意識——これには常識のほか科学的意識も含まれる——にたいして、哲学には「哲学固有の認識方法があることの証明」(Prüfung)が必要であり、そして、この必要の自覚において自然的意識は哲学的意識に転化しようとする。感情、直観、欲求、意志、等の諸規定は、それらが、意識されているかぎりで一般に表象と呼ぶことができるのであるが、常識においては、そこにおける何らかの思想は、これらの諸表象に常に囚われているか纏わられているかして、「これらの知り慣れた諸表象を取り去られてしまふと、自分がこれまで安心して立っていた堅固な地盤を喪失したような気になる。そして抽象化された概念を何らかの手段で飽くまで表象の形で思い浮べようとする。」(E-§ 3. A.)

このような点は、科学的意識においても多かれ少なかれ共通の事柄である。もともと、近世の始めに自由になった思惟が、現象界の無秩序な無限の素材に向つていったところに成立したものであつて、そこにおける普遍的なもの、必然的なものを法則として抽象的に把むにしても、これらの諸法則は常に経験と接触していなければならず、経験的諸表象から離れて抽象的に固定されているばあいにしても、仮説であり臆見であるかぎり、常に現実の経験に妥当するか否かの検証を不可欠のものとしてゐるわけである。

要するに自然的意識は、自らの思想を抽象の世界にとどめてあくことには不安であつて、常に「知り慣れた表象への渴望」(§ 3. A.)を求めているものなのである。ところが、これらの自然的意識と異つて、哲学とは、一般的に「表象を、思想やカテゴリーに、より正確に言えば、概念に、変えるものでなければならぬ」(§ 3. A.)とヘーゲルは言っている。そして、ヘーゲルの概念的認識の方法もまた、思惟が自己のうちで自分自身の必然性にしたがつて動く、ということではかないわけである。あたかも、ここに、「人々に哲学は解りにくいと言われる理由がある。というのも、人々が抽象的に思惟することに慣れていないために、純粹な思想をしっかりとつかまえて、そのうちで動くことができないからにすぎない」(§ 3. A.)とヘーゲルも言っている。すなわち、抽象的思惟に慣れるための努力もせず、哲学の難解を慨嘆したり、批難したりすることは、そのこと自体が誤りであるわけである。

さらに哲学の、否、ヘーゲルの思弁哲学の難解ということとは、次のことに係っている。——ヘーゲルの思弁的思惟は、自分だけの世界で自分だけであるわけであるから、自分自身で動くよりほかに方法はないわけであり、しかも、自分が自分自身で直接的に動くものであるかぎり、自己自身から、すなわち自己に直接的なものから動き初めるよりほかに、これまた方法はないわけである。しかしながら、経験世界に住むわれわれには、この端緒を発見するということは、必ずしも容易なことではありえないのである。経験的な直接性から帰納的に分析してゆく方法しか現実にもっていない自然的意識にとつては、前提に慣れてしまつて、無前提な思弁の世界に入ること自体が、すでに困難である上に、一切の表象の捨象された純粹



思想のなかで、何処から如何に動いてよいか全くわからないで、ただ不安のままに動揺し、さまざまほかないからである。その運動の端緒を見付けることは、「それ自身で前提を作ることであり、したがって無前提の前提を作る」ということなるからである。思弁的に思惟することとは、かかる端緒を発見することの困難に、まず最初から当面しているわけであるが、ヘーゲルとしては、この困難の古服のためには、思惟が自己自身に帰りさえすればよいのであり、その意味で、われわれが、「ただ哲学しようとする決心」をするか否かに係っている、というのである。

しかし、この点からのヘーゲル批判は、学界でそれぞれの立場から既に形がついているところであるからして、そして、本稿においても、随所に、しかも批判の角度を明示して論述してあるからして、ここでは、右の指摘以上には問題にしない。ただ、われわれの問題としては、今この論述の段階では、ヘーゲルの哲学体系がマルクスの『資本論』に如何に批判的に継承されているか、という点に焦点がしぼられねばならない。しかも、この目標のもとに、われわれは、ヘーゲルの概念的思惟に必然的な円環運動を、まず初めに前節において、深く、必然性ということに内在する合目的活動という見地から、続いて本節において、ヘーゲル自身の思想に沿うた図式によつて、理解してきたわけである。そこで、右の目標に近づくために、われわれは一步すすめて、ヘーゲルの円環的体系の図式が果してそのまま『資本論』に適用しうるか否かの吟味に、移つてゆかねばならないのである。